

ボナーのマルサス論

柳田芳伸

I. 課題

本稿の主眼は筆者自身の問題意識からボナー（James Bonar, 1853-1941）によるマルサス（Thomas Robert Malthus, 1766-1834）論の特性を探求し、素描することにある。後年に『マルサスと彼の業績』〔以下、『業績』と略記〕で盛名を馳せることになる¹⁾ボナーが77年にオックスフォード・ベイリオル・カレッジで文学士を取得した後に、間を置かずしてドイツのライプチヒ大学〔図1.を参照〕やチュービンゲン大学で引き続き研鑽に励んでいた史実²⁾は案外知られていない。中でも、ボナーがその際にライプチヒ大学で経済学担当教授のロツシャー（Wilhelm Georg Friedrich Roscher, 1817-95）〔図2.を参照〕から一定の影響を受けている点は見過ごせない。というのも、講義用の小冊子として『歴史的方法による国家経済学講

図1. ライプチヒ大学



（注）筆者所有の古絵葉書より。

図2. ロッシャー

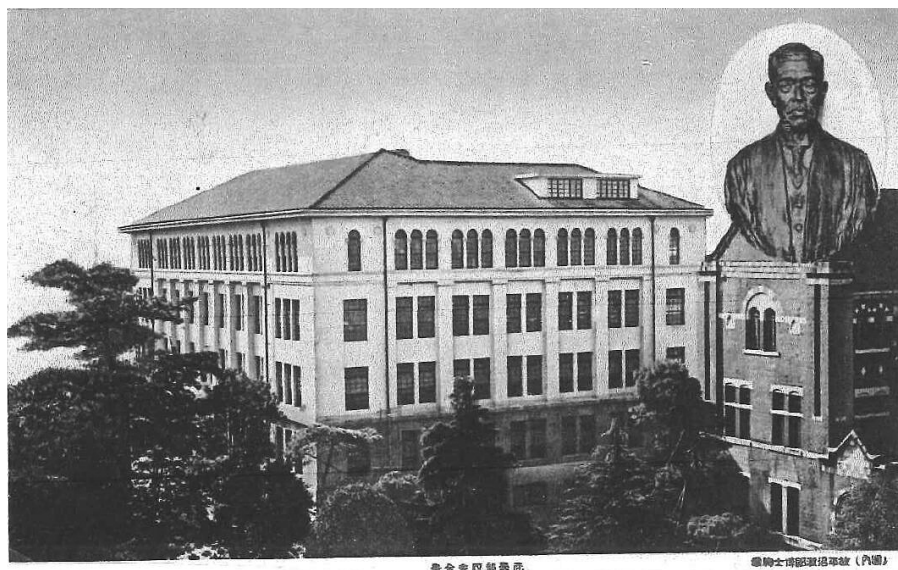


(注) 杉本栄一訳『ロッシャー英国経済学史論』(同文館、1929年)の扉より。

義要綱』(1843年)を既に世に送り出していた³⁾ロッシャーは当時これを大幅に拡充し、それを全5巻の『国民経済体系』として順次公刊し始めていて、例えば、既刊の『国民経済の基礎』(1854年)の第5編「人口増加に関するマルサスの法則」ではマルサスの5版あるいは6版『人口論』からの引用が何度も散見されるからである。しかもロッシャーにあっては、彼が基本的に範としたサヴィニー(Friedrich Karl von Savigny, 1779-1861) = アイヒホルン(Karl Friedrich Einhorn, 1781-1854)の歴史的方法自体を「リカードウ(David Ricardo, 1772-1823)学派からは遠く…むしろマルサスやラウ[Karl Heinrich Rau, 1792-1870]の方法に近い」と自覚されていた⁴⁾のである。ボナーがロッシャーのこうした視角や分析から大いに知的刺激を受けつつ、かつまたその博覧強記振り⁵⁾にさぞかし驚嘆し、これに倣おうとしていたと容易に推察できよう⁶⁾(〔2〕293頁註1)。

『人口論』を「マルサスによる優れた研究書(investigations)」⁷⁾と称したロッシャーによるマルサス論評からは啓発される点がある。例示するなら、ロッシャーはマルサス法則の1源泉をチャイルド(Josiah Child, 1630-99)の『新交易論』(1693年)の記述に見出したり⁸⁾、あるいは大衆の奢侈消費による公益については、マルサスの『経済学原理』「に至って始めて十分な発展を遂げた」⁹⁾と論じたりしている。また、全20講(全644頁)から成っている平沼淑郎(1864-1938)〔図3.を参照〕著『通信教授経済学』¹⁰⁾(通信講学会、1886-8年)の第12講人口論(全42頁)はロッ

図3. 早稲田大学と平沼像



(注) 筆者所有の古絵葉書より。

シャー著『国民経済の基礎』の英訳本の第5編¹¹⁾を種本にしていて、平沼は「人口理論に於いては極めて忠實なるマルサスの祖述者であったのであるが、労賃論の範囲に於いては…労賃論基金説を展開している…マルサス説の日本への輸入という點に就いては、一般経済學者の中で明治初年に於いて極めて重要な地位を占めるものである」¹²⁾とされ、ロッシヤー「を通してマルサス説を日本に早く紹介した功勞者であった」¹³⁾と位置づけられてもいるのである。しかし他方では、シュモラーによると、ロッシヤーはただ人口論の「取扱いの場所に困って、附録に収め」たのであり、「マルサスの過剰人口論が今日においても正しいかどうかを吟味しようとしたのではなく、現在の人口問題の人口の動きのなかに織り込もうとしたのである」¹⁴⁾と見立てられている。

このようにロッシヤーのマルサス論には再検討する余地が残されてはいるけれども、本筋に立ち返りたい。すなわち、公務員の仕事をこなしながらも、81年にベイリオルでも文学修士を取得したボナー¹⁵⁾がその前年に早くも『坊主 (Parson) マルサス』¹⁶⁾〔以下、『坊主』と略記〕を私家版 (private circulation) としてエディンバラから刊行していたことへと戻りたい。本稿の末尾に付しているのはこの小著の未訳の後半部である。そして本著を嚆矢にしてボナーのマルサス研究が本格的に開始され、多少の削除・修正を伴ってはいるものの、初版『業績』(1885年)の1～57頁を構成していくことになる¹⁷⁾。この『業績』は画期的労作で、「今なお参照に値する」名著と評されている¹⁸⁾。ボナー自らが「マルサスに関する興味は1895年以

来増しこそすれ決して減っていない」¹⁹⁾と表白しているように、その後もボナーの研究は2版『業績』（1924年）へと豊富化されていく。グラスゴー大学時代の恩師であった故ケアド（James Caird, 1816-92）教授に捧げられたこの2版の序において、ボナーはいみじくも「この再版においては伝記（第5編）が拡大せられた。第1編第2章44〔訳書37-8〕頁、第5章152〔訳書212〕頁、第6章169〔訳書234-5〕頁、第2篇第2章281〔訳書365〕頁、第4章318〔訳書431-2〕頁、及び第4編398〔訳書515〕頁には註が付加されている。…その他については、この書は1885年に於けると同じである。…本著は人口に関する論説(treatise)ではないが…大戦(Great War)前後の政治上の変化を問うまでもなく、新しい証拠や討論を考慮して全面的に書き改められる必要があるであろう。」と書き記している²⁰⁾。そして爾後も、周到で徹底したボナーによる検索は亡くなるまで継続されていき、遺作『トマス・マルサスの生涯』（1941年）へと結実されていったのである。

とりわけ、マルサスの伝記的事柄に関するボナーの博搜は凄絶を極めていて、もはや超人的とも形容できよう。この点、故ジェームズ（Patricia Drift James, 1917-1987）女史の『マルサス旅行記』（1966年）や『人口 マルサス：彼の生涯と時代』（1979年）、あるいはプレン（John Michael Pullen, 1933-）の一連の卓論²¹⁾に先駆けた不朽の学績といえよう。おそらくは、非英語圏の研究者では太刀打ちし難い領域であろう²²⁾。本稿でも、この分野には踏み込まず、ボナーによるマルサス解釈の基調や本義のみに絞り、これを回顧することとしたい。

II. ボナーの基本的観点：クリスチャン・ポリティカル・エコノミスト²³⁾としてのマルサス

ボナーはグラスゴー大学でスミスに対しては幾許かの知見を修得していた。彼によるマルサス研究の足跡を大雑把であれ推測してみよう。ボナーはライプチヒ大学でロッシヤーを介してたまたま『人口論』に向き合うことになった。その3版以降の後続諸版に付された附録の冒頭の文節には、「本書全体を読む余暇のなかった人々が、耳で聞いた断片的で不正確な言説によって私見の幾つかの要点を誤解したり、私が1度も抱いたこともない所見を私に帰したりすることがないように、続く数頁に目を通してけると大変有難いと思う。」（〔7〕IV207-8頁）と記載されていた。しかも、その直後には、「私を人口の敵(an enemy)と推論するのは、私の議論についての決定的な思い違いである。…私は地球が満つる(replenished)ことが創造主の意図であると信じているが、それはもちろん健康で(healthy)、有徳な(virtuous)、かつ幸福な(happy)人口であって、不健康で、不道徳な(vicious)、か

つ窮乏した (miserable) 人口ではない。」([7] IV209-11頁) と明記されていた。ボナーはおそらくはこの件に刮目し、マルサス研究に着手し、帰国後には初版『人口論』及び2版『人口論』の精読、両版の比較照合へと進展していき、ついには初版『人口論』の最後の2章に見られる「神学的功利主義 (theological Utilitarianism)」([3] 188頁)²⁴⁾という視点から『人口論』の後続諸版、並びに他のマルサスの諸著作等を読み返していくという独自の研究方法²⁵⁾を切り開いていった。あらまし、このように推量できよう。

さらに、取り違いとの誹りを覚悟した上で、その主調をかみ砕いておきたい。ボナーの所見によれば、マルサスの究極的願望は「地球の力の限界」²⁶⁾ ([2] 347頁) まで「健康で、有徳な、かつ幸福な人口」([2] 502頁、また序言4頁、47、143、179-80、187、233、245、311、349-50、455頁も参照) で充満させることであった²⁷⁾。その実現のために、マルサスは「功利 (utility) の原理」([6] IV31頁)²⁸⁾の働きに大きな期待を寄せたけれども、それは平等社会では機能せず ([2] 454頁、また525頁も参照)、私有財産制度とハードウィック結婚法 ([2] 239、251頁) 等に基づいた結婚制度²⁹⁾ ([2] 446頁) とが確立された文明社会においてこそ作用するということをいわゆる「神義論 (theodicy)」³⁰⁾を基底に据え諄々と説こうとした³¹⁾ ([2] 295-6、437、446-7、453-7、474-5頁)。つまり、マルサスの「社会哲学」([2] 434頁) では、「この地上の楽園」([2] 456頁) における「全体としての『幸福の最大量』」([2] 455頁) が第一義であり ([2] 474頁)、「社会の主要目的は単なる害悪 (evil) の除去ではありえず…善 (good) の樹立でなければならず、害悪は精々善にとっての不可欠な (essential) 条件である」([2] 456-7頁) のであって、むしろ「貧困 (poverty) の力が労働の1因である」([2] 61頁) と把握されていたとする。そしてその帰趨として、マルサスにとっては、それらの「黄金の中庸 (golden mean)」([2] 404、438頁) の達成がとても肝要で、わけても「諸階級の均衡 (balance of classes) と中庸の安全性 (safety)」([2] 478頁) が至要であるとされる。また、それが保たれる限りは、人口の増減と生活資料 (標準) ないしは賃金の上下との間で「擺動 (oscillation)」([2] 119、205、また166頁も参照) が際限なく繰り返されていき³²⁾、その結果、一方では下層階級の中流階級化 (中流階級への肥大化) も漸次進んでいくけれども ([2] 233-4、312頁、また312頁も参照)、向上力を有さない「殆ど市民と呼びえない最下層階級 (lowest classes)」の方はただパンを求めての闘争に明け暮れ続ける³³⁾と把握されている ([2] 482頁)。

無論、上のようなボナーの論証の仕方には茫漠さや不徹底さ、あるいは非体系性が隠見してはいる。けれどもその大筋は大過ないように思われる。したがって、ボ

ナーはこうした視点からマルサス「の議論を私の力の及ぶ限り忠実に示そうと試み」（〔2〕序言9頁）、「想像上の（supposed）マルサス的論題」を排斥し、「人口に関するマルサスの最も円熟した見解」（〔2〕339頁）を新マルサス主義（者）の主張とはもとより、マルサス主義（者）の意見からも截然と切り離し³⁴⁾（〔2〕5、7、36-7、211、514頁）、峻別、析出しようと企図したと概括できよう。

しかしこうした接近法は即座に経済学者としてのマルサスを蔑ろにするものとの非難を浴び、一蹴されもしよう。その通りである。しかしこの点について、ボナーは『業績』の巻頭部で、「以下の頁では、本細目（detail）が主題となろう。マルサスの『経済学原理』や諸小（miner）著作（少数ではないけれども）はただ『人口論』との関連においてのみ注目されよう。」（〔2〕序言10頁）と断っていて、実際にマルサスの「他の経済学の著作は人口論に従属するものであり、そこから発生したものと言うことができるであろう」（〔2〕91頁）と公言しているのである。それに、マルサスの『経済学原理』は「特に彼の注意を引くに至った様々な課題に関する経済学上の記録の蒐集に過ぎない」（〔2〕296-7頁）のであって、あくまでも『人口論』とマルサスの「経済学説との論理的関連が（それが存在する限り）」（〔2〕288頁）においてのみ考察されるにとどまると明言してもいるのである。別言するなら、ボナーは、「経済学に対するマルサスの影響はリカードウのそれよりもはるかに小であった」（〔2〕367頁）と評断し、「リカードウ主義（Ricardianism）」ないしは「リカードウ派（Ricardians）」（〔2〕338、375、407、468頁）の経済学が「正統派（orthodox）経済学」（〔2〕265、289、407頁、また68頁も参照）としてこの時代を席卷していたと見通している³⁵⁾のである（『業績』412頁）。筆者もボナーのこの見立てにはさしたる異論はない。ゆえに、以下、ボナーの高見を個人的関心にそって解剖していくこととしたい。

Ⅲ. 生存闘争から奢侈（生計標準）論へ

ボナーの研究のどこに引き寄せられるのであろうか。その1つは、マルサスが用いた「生存闘争（struggle for existence）」（〔2〕30-1、168頁）や「余地（space）と食物のための闘争」（〔2〕68、90頁）³⁶⁾がいかにしてダーウィン（Charles Darwin, 1809-82）の『種の起源』（1859年）に取り入れられていったかという点であるのかもしれないけれども、この部面に関するボナーの帰結は至って平凡である³⁷⁾（〔3〕39、338頁、また343頁も参照）。ボナーはダーウィンとダーウィン主義者（Darwinism）との識別には過敏なまでに神経を尖らせているのに（〔2〕5、36-7、529

頁)、こと「ダーウィン=マルサス問題」では、あたかもダーウィンが初版『人口論』からこれを撰取したかのように記述してしまっているし（〔2〕70頁註2、また68頁も参照）、またペイリーの神学思想がダーウィンに翳している陰影を検証してもいない³⁸⁾。マルサスとダーウィンとの1媒介者となったマーティーノ（Harrite Martineau, 1802-76）³⁹⁾が『人口論』をその「外側だけしか見ない人々によって極めて能弁かつ激烈に」非難しているのを耳にした（1816年）との記述が唯一目を引くのみであろう（〔2〕6頁）。

これに比し、ボナーが「文明国内では闘争はただ生きるためのものではなく、より良く生きるための戦いであり」（〔3〕40頁）とし、「最下層より上のあらゆる社会階層（all grades of society above the lowest）」（〔2〕130頁、また237頁も参照）における「競争の文明化力（civilizing power）」（〔2〕136頁）をマルサスの文明社会における牽引力として力説している点はけっして見落とされてはならない。ボナーは「愉楽の標準（standard of comfort）」（〔2〕162、166、169、244、280、370、530頁、また〔3〕25頁、なおこの原文頁はp. 385）や「貧窮の標準（standard of wretchedness）」（〔2〕466頁）をしっかりと射程に収めているばかりか、マルサスが用いていない「生計の標準（standard of living）」を盛んに配し（〔2〕序言5頁、129-30、133、142、165、196、237、371、404頁、〔3〕341頁）、「必要が進歩を求めて活力ある（vigorous）か、または健康な努力を導かないような下降（depression）の点がある。それは1つの生計の標準であり、健康な刺激として作用し、肉体的渴望物（cravings）と巧妙に鎬を削る肉体的必需品をかなり上回る愉楽への欲求（desire for comfort）である。」と喝破しているのである（〔3〕342頁）。

掘り下げてみよう。まずは、マルサスにあって、「人口増加との関係」するとされる「奢侈品（luxuries）と必需品（necessaries）との区別」（〔3〕23-4頁）に着目し、通観しておきたい。このうち、「第1の（prime）必需品」（〔2〕370頁）として、「パン以外の食物」（〔2〕420頁、また228頁も参照）である「燻製ニシン（red herrings）」（〔2〕302頁）や「家畜及び乳製品（dairy produce）」（〔2〕340頁、また302頁も参照）等も例示してはいるけれども、やはり「主要食（staple food）である小麦の…（中等質の）4ポンド重量ローフパン（four-pound loaf）」（〔2〕299頁、また306頁も参照）に視線が集中されていよう。アメリカやポーランドからの外国産小麦の輸入にも留意されてはいるが（〔2〕343頁）、「じゃがいも」を除けば（〔2〕267、279-80頁、470頁註5、522頁）、「穀物商人」が「穀物市場」で調達、販売する穀物（〔2〕302-3頁）からの精白パンや小麦混合パン、あるいは黒パン（brown-bread）が思い設けられていよう⁴⁰⁾（〔2〕301頁）。もちろん、「肉体的必

需品」(〔2〕254頁)あるいは小屋、衣服といった「他の絶対的必需品」も思慮に入れられてはいる(〔2〕370頁)⁴¹⁾。

他方、「化粧室 (toilet)、食卓 (dinner-table)、及び客間 (drawing-room) の無数の小奢侈品」(〔2〕170頁)や「ピアノ及び小馬車」(〔2〕171頁)といったような「奢侈に関するマルサスの見解」⁴²⁾ (〔2〕298頁)はどのように検出されていようか。その勘所は、2版『人口論』以降の諸版に盛られた「国民的富の観点、及び国民的幸福の観点、その何れから見ても、最も有益であると思われるものは、人民大衆 (mass) の間での奢侈の普及であって、少数者における奢侈の過度 (excess) ではない。」(〔6〕174頁)という1文を主たる論拠にして(〔2〕371頁)、マルサスが「奢侈品に対する嗜好」を「過剰人口に対しても過剰生産に対しても我々保護する傾向をもつであろう」として奨励し始めていたと導出している点であろう(〔2〕404頁)。奢侈を積極的妨げの1つとしていた初版『人口論』では、マルサスは富者における「狭小な (narrow) 奢侈」(〔5〕210頁)という認識にとどまっていた、しかし2版に至って奢侈を積極的妨げの1つに組み入れず、一転、奢侈の社会化を唱え始めた、ボナーは不十分であれ⁴³⁾、この点を逸早く示唆してくれているのである。むべなるかな、ボナーのこの慧眼も「怠惰 (idleness) の奢侈」や「らん惰 (indolence) の奢侈」に、あるいはまた「殆どあるいは全く何もしない (doing little or nothing) 奢侈」や「便宜品や愉楽品を所有するという奢侈」には一切及んではない⁴⁴⁾。しかしマルサスの奢侈観の変化へのその着眼は先見の明であったと評しても支障あるまい。

IV. 「貧窮の標準」と「愉楽の標準」

先の2版『人口論』からの抜出部における奢侈の実質は「便宜品や愉楽品を所有するという奢侈」の限定されているように思われる。それに対して、5版『人口論』における次の記述は、マルサスはその各々の必要度に応じて生活資料 (賃金財) を必需品、便宜品、愉楽品、及び奢侈品の4つに区分して把握しようとしていた⁴⁵⁾ことを想起させる。すなわち、「社会の下層階級の愉楽は専ら食物に依存するものではなく、また厳密な必需品にすら依存するものでもない。彼らは多少の便宜品を、また奢侈品すらも支配しえない限り、良い境遇にあるとは考えられない」(〔8〕Ⅲ 323-4頁)とある。ボナーはこの文言を引き合いに出してはいないけれども、マルサスの著作から労働者層の「便宜品及び愉楽品に対する嗜好」(〔2〕405、467頁)を引き出すばかりか、さらには「富は欲望のために存在し、欲望は人類の進歩と共

に変化し、富の通念は文明と共に拡張し、そしてある時代の、またある人の奢侈品は別人の必需品である…この相対的な問題をその条件が絶対的であるかのように取り扱い、人間を石盤上の数字に取り扱うのは不可能である」〔2〕172頁）とさえ付け加えている⁴⁶⁾。このように俯瞰した上で、マルサスは『国富論』にならって⁴⁷⁾、「我々の境遇を改善しようとの欲求と、それを悪化させることに対する恐れ」〔6〕Ⅲ139頁）、貧民の「境遇を改善しようとの強力な欲求（かの公共的繁栄の主発条）」〔6〕Ⅳ95頁）、及び「今日の公共的繁栄の主発条を形成している貧民の境遇を改善しようとの生き生きとした活動」〔6〕Ⅳ175頁）を介しての階級の上昇を標榜していたと再説するのである（〔2〕168-71、427頁、また457-8頁も参照）。

ところで、生計の標準を表示する1指標であり、マルサスが用いた「貧窮の標準」については、その出典は瞭然としている。『人口論』の2版以降の諸版において、従って6版に至っても、マルサスは「大多数の国において、下層階級の人々の間には、その点以下では結婚し、子孫を増やし続けられない貧窮の標準というようなものがあるように思われる。この標準は国によって異なり、土壌、気候、政治、知識の程度、及び文明等の同時に生じている様々な事情によって形成される。それを引き上げるのに寄与する主たる事情は自由、財産権の安全、知識の普及、並びに生活の便宜品と愉楽品に対する嗜好である。それを引き下げる主因たるものは専制と無知である。」⁴⁸⁾〔6〕Ⅳ109頁）と、また続けて「社会の労働階級の境遇を改善しようとの試みにおいて、我々の目的は自立の精神、品位のある自負心(decent pride)、及び清潔と愉楽とに対する嗜好を涵養することによって、可能な限りこの標準を引き上げることではなければならない。良い政府が社会の下層階級の慎慮的習慣や個人的上品さ(respectability)を増加させる効果は既にこれを主張した。しかし確かに、この効果は良い教育制度がない限り、常に不完全であろう。そして実際に人々の教育に対応しない政府であれば、何れも完全域には接近できない。」〔6〕Ⅳ109-10頁）と断言している。ボナーはこれらの章句をほぼそのまま転載し、俎上に載せているのである（〔2〕466-7頁）。

この事自体が1つの先駆的特徴である⁴⁹⁾と評しても過言ではないであろう。一瞥しておかなければならない。わけても、その際に、ボナーの目が「殆ど市民と呼びえない最下層階級(lowest classes)」⁵⁰⁾〔2〕482頁、また130、189、525頁も参照）に他ならない「貧窮貧民(wretchedly poor)階級」〔2〕157頁）あるいは「困窮貧民(destitute poor)」〔2〕413頁、また41頁も参照）に向けられていて、とりわけマルサスが「彼らは向上する力に欠けている」ことを承認していたと主張している点は黙視し難い（〔2〕482頁）。確かに、それは、「万人が中流でありえないこ

とは明らかである。上層と下層とは事の性質上絶対に必然的であり、またただに必然的であるばかりでなく、著しく有益でもある。」〔6〕IV175頁〕という中流階級肥大化をもってすれば、当然の成り行きではある。しかしより緊要なのは、ボナーが次のように見立てようとしているように憶測できることである。すなわち、「便宜品と愉楽品に対する嗜好」〔2〕405頁）や「清潔と愉楽とに対する嗜好」に関して、「例えば石鯨や靴や蠟燭の灯火（candle-light）のようなそれが健康な生活に不可欠である限りで必需品となっている多くの『便宜品（conveniences）』」⁵¹⁾〔2〕370頁）と解して、「困窮貧民」〔2〕413頁）である最下層階級の男女の未婚者たちはそれらを生活の中に取り入れていき、主たる予防的妨げである慎慮的な結婚⁵²⁾をなすようマルサスによって創案された指針として「貧窮の標準」を解釈しようとしていたと推察できることである。これは、奇しくも「健康で、有徳な、かつ幸福な人口」の緩徐な増加というマルサスの主眼に暗合していよう。

反対に、もう1つの「愉楽の標準」の方の出所は不分明で、判然とししない。マルサス自身による初出は『エディンバラ評論』誌上の1808年論文であり、実際にこの語を用いて賃金分析をおこなったのは『経済学原理』（1820年）においてである⁵³⁾。さらに、「貧窮の標準」を削除して、『経済学原理』から当該部分の抜粋引用を行っているのは、「『人口論』の課題を独立の形に於いて、万事細目にわたって迫り、再論している最後の試み」〔2〕114頁）と号される「人口」（1822年脱稿、24年刊）においてのみである⁵⁴⁾。前述したように、マルサスの「議論を私の力の及ぶ限り忠実に示そうと試みた」〔2〕序言9頁、また序言12頁や224頁も参照）と謳っているボナーであるから、マルサスのこういった墨痕からも抽出して然るべきであるが、そうした痕跡は見当たらない。ボナーは一体どこから「愉楽の標準」を吸収したのであろうか。

これまた推測の域を出ないけれども、ボナーは「我々の親愛なる友（our dear friend）」⁵⁵⁾と呼んだマーシャル夫妻の『産業経済学』（1879年）から、またそれを媒体してのミル（John Stuart Mill, 1806-73）の『経済学原理』（1848年）から学び取ったように推知される⁵⁶⁾。しかしながらそのマーシャル自身が1884年3月に開催されたジョージ（Henry George, 1839-97）との公開討論会を1転機として〔2〕530頁も参照）、「愉楽の標準」の内容には懐疑的となっていき、2版『経済学原理』（1891年）に至り、これまで「愉楽の標準」に付与してきていた含意を「生活（life）の標準」に置き換えるという煩瑣な改訂を施した⁵⁷⁾のである。それに、マーシャルの所見では、そもそもマルサスは「生計の習慣が労働者の能率に、したがってまたその稼得力に及ぼす影響にはまだ気付いていなかった」⁵⁸⁾とされていた。ボナーは

こうした思潮の中でマルサスの著作を読解しようとしていたのである。ゆえに、ボナーの筆法に気迷いや右顧左眄が見出されるのもやむをえないであろう。例えば、マーシャルにしたがえば、「経済学は一面においては富の研究であるが、他のより重要な側面においては、人間の研究の一部 (a part) なのである」のであり⁵⁹⁾、この有名な一節は、マルサスの思想の真髓を「人間との関係における富」(〔2〕291頁)において究明しようとしたボナーの研究⁶⁰⁾方針に一脈通じているように思えてならない。

ともあれ、論点を文明国イギリスの「労働人口の愉楽」(〔2〕166頁)に戻そう⁶¹⁾。ボナーの識別では、マルサスは次のように思い描いていた。すなわち、文明社会における労働者の愉楽はそもそもかなり高度であり(〔2〕119、135頁)、しかも「より大なる愉楽を求めての闘争」(〔2〕136頁)を繰り返し、「愉楽の新展望 (vista)」(〔2〕172頁)を開拓していく、食物以外の愉楽品や「合理的な (reasonable) 愉楽」(〔2〕204頁)ばかりか(〔2〕280、404頁)、清潔 (cleanliness) 観や「愉楽である炉辺 (fireside)」(〔2〕440頁)にまで広がっていき(〔2〕404頁)、ついには愉楽の充実が道徳的抑制の実行へとつながり(〔3〕341-2頁)、究極には、有徳な人口が緩やかな増加(減少ではない)を遂げていくことになる(〔2〕166頁)、しかしながら現実には働く階級が知識、愉楽、自制 (self-restraint) において改善していくのは難題であるかもしれない(〔2〕412頁)、と。

V. むすびにかえて

だとすれば、マルサスはこの難問にどう向き合おうとしていたと読み解いているのであろうか。しめくくりとして、ボナーが注視してやまなかった「完全な実際的人間 (practical man)」(〔2〕289頁)としてのマルサス像に焦点を合わせると共に、ボナーの研究を起点する新たな切り口の可能性を呈示しておきたい。

ボナーがマルサスの政治論を首尾一貫してフォックス (Charles James Fox, 1749-1806) 派の「進歩したウィッグ (an advanced Whig)」(〔2〕466頁及び〔3〕235頁、また〔2〕9、11、461、463頁も参照)として描き出そうとしていたことはもはや贅言を要しない既知事と言えよう⁶²⁾。それゆえ、ここでは次の2つの言及のみに絞り込みたい。その1つは、マルサスが2版『人口論』の中で、最下層階級に対する神義論を下地にした宗教教育と共に(〔6〕IV103頁)、併せて「少数の経済学の最も簡単な原理」、例えば「市場を規制している通常の原因」等を「教区教育制度」⁶³⁾の下で流布できれば、下層階級の無知を縮小しえ、「貧窮の標準」を引き上

げえると願望していた（〔6〕IV104-10頁）点に関連してである。問題となってくる争点はその際に、マルサスがスミスの明示していた分業の弊害を意識していたか否かである。つまり、分業による専門特化や「農業労働節約や過程」が突き進んでいく中で、生計の標準の向上を約束するとされる「農業上のあらゆる熟練」がどうなっていくと眺望していたかである（〔2〕129-30頁、また298、354-7、359、368-9頁も参照）。マルサスは基本的に農業機械による労働排除説に立って議論を進めている。その場合、農業労働者の他の職種への移行は順であると考えたのであろうか。おそらくは、否定的な見方に傾こう⁶⁴、マルサスもスミスと同様に「やはり文明社会では…農民は農業への専念を求められる」⁶⁵と想定していたように推されるのである。

いま1つ、ボナーが5版『人口論』中の文言⁶⁶に注目して、「人が結婚する場合には幾人の子供が生まれるかは不明であるから、マルサスは法律によって6人以上の子供には手当を支給しても弊害はないと考えた」（〔1〕上28頁、〔2〕469-70、472頁も参照）と論及している点をも一考しておきたい。留意すべきは、そのことが慎慮的結婚をなした既婚の労働者家庭における「愉楽の標準」と関わっていることである（〔9〕下18-9頁）。平たく言えば、たとえ結婚するに際し、「貧窮の標準」を優に満たし、「家族を養う合理的な見込み」である「1日1ペックの小麦」⁶⁷を入手する目鼻を付けていたとしても、結婚後に時として不慮の困難に見舞われたなら、労働者世帯の収入が労賃に家族への教区手当、婦女子の収入、及び請負仕事(task-work)による現物支給を加えた混成となったとしても無理からぬ（〔6〕Ⅲ353頁、〔9〕下32-3、135頁）、マルサスはこう見定めていたと立言されているのである。もちろん、「高い労賃と自立と道徳的抑制とは、教区補助や受救民家族を伴う低い労賃に勝っている」（〔2〕424頁）のではあるけれども、こうした俄かの場合⁶⁸での家族手当は「健康で、有徳な、かつ幸福な人口」の緩徐な増加を希求したマルサスの理想から乖離していないとされるのである。

確かに、ボナーは紛れもなくマルサスを「古い (older) 功利主義者たち」の1人に数えている（〔2〕454頁）、しかし多端では、「マルサスは穏健な (mild) ウィッグで、全生涯を通して、政治的には決してそれ以上過激 (rabid) になることはなかったけれども、そのマルサスが哲学的急進主義者の英雄になったことは皮肉である。」⁶⁹との寸言を残してもいる。これは、もとより、親・人口主義と調和するマルサスの慎慮的抑制論が産児調節を提唱する新マルサス主義者たちに転用され⁷⁰、変容していったことを揶揄してのことと推断される。だからといって、「マルサスは贖罪という迷信に反対であり、人間の進歩の思想に賛成である。事実、マルサス

は常に自由主義者であり、ウィッグであって、これ〔初版『人口論』〕以後もそうである。』⁷¹⁾との評言が黙殺されてはならない。ボナーの達見はしかと銘記され、今後も継受されていく必要がある。

仮にいま親・人口主義を裏返してみるなら、マルサスは死亡が出生を促していくと観察しつつ（〔2〕142、193-4頁）、ゆるやかな人口増加に向けて乳幼児生存（死亡）の動向をも睥睨していたことを伺わせよう（〔2〕253頁）。ボナーもマルサスが「すべての人の死亡率の低下」を切望し（〔2〕234頁）、只管「若い人間生命の浪費の終焉」や「人間生命の経済（economy）」を念願して⁷²⁾、教育法と共に、「衛生法（sanitary laws）や工場法（factory laws）が厳格にかつ普遍的に強行されるべき」（〔2〕480頁）と唱えていたと設定している。最後に、この周辺部を瞥見しておきたい。

マルサスの死亡表（bills of mortality）への関心は初版『人口論』からであり、それは専らプライス（Richard Price, 1723-91）の5版『遺族給付の考察』（1792年）から借用したジュースミルヒ（Johann Peter Süßmilch, 1707-67）の作成した表に負っていた（永井訳〔5〕66、94頁）。その後、4版『遺族給付の考察』（1783年）を利用した2版に至り、死亡によって生じた余地を出生が補充していくというマルサスの「人口動態平行に関する学論」が開花し、明確化されていったと解されている⁷³⁾。この見極め自体に付け加えるものはなかろう。属目したいのは、一方で親・人口主義であったマルサスが、他方では多大な乳幼児死亡を憂慮していたとの指摘である。マルサスの健康・衛生論を読み解く上でこれを細かに吟味していく作業は避けられない⁷⁴⁾であろう。その鍵となるのは、マルサスが人口の「自然の秩序（order of nature）」を「攪乱している原因（disturbing causes）」をどのように解釈していたかであり（〔10〕288-9頁、〔12〕25頁）、かつまた「人口の自然法則、または知られること最も少ない障害の下における人類の増殖比率を確かめる努力でなければならない」（〔10〕324頁、〔12〕72頁）と述べている意味の解明である。そしてその際には、その2版（1761-2年）以降の諸版の序文に「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」との句を掲げているジュースミルヒの『人間の出生、死亡、及び繁殖より証明された人間の変動に存する神の秩序』からの陰りを決して無下にするわけにもいかない⁷⁵⁾、筆者にはそう思えてならないのである。

（注）

- 1) 例えば、マーシャル（Alfred Marshall, 1842-1924）はマルサスについての1つの「優れた解説書（excellent account）」として、キャンナン（Edwin Cannan, 1861-1935）著『生産及び

- 分配学説史』（1893年）や全3巻のニコルソン（Joseph Shield Nicholson, 1850-1927）著『経済学原理』（1893-1927年）の第1編12章と共にボナーのこの著を挙げている〔馬場啓之助訳『マーシャル経済学原理Ⅰ～Ⅳ』（東洋経済新報社、1965-7年）I 138-9頁注〕。また、マーシャルはボナー編中野正訳『リカードウのマルサスへの手紙〔1887年〕（上）・（下）』（岩波書店、1942-3年）を「優れた書簡集」と称賛している〔同訳書Ⅲ296-7頁、また同Ⅲ285-6頁も参照〕。
- 2) 未刊のタイプ稿（全467頁）である James Bonar, *Life of Thomas Malthus*, 1941, p.2.
 - 3) なお、『国家経済学講義要綱』で用いられた3版『人口論』の大半に関しては〔ロツシャー著山田雄三訳『歴史的方法に拠る国家経済学講義要綱』（岩波書店、1938年）197、304-5頁〕、イギリスに住んだことのある医師ヘゲヴィッシュ（Franz Hermann Hegewisch, 1783-1865）が1806年にドイツ語版を上梓していた〔伊藤久秋著『マルサス人口論の研究』（丸善、1928年）2、5、224-5、378-9頁、及び永井義雄・柳田芳伸編『マルサス人口論の国際的展開』（昭和堂、2010年）8章183-4頁〕。
 - 4) ロツシャー同上訳書20頁を、あるいは314頁をも参照。また、ラウのマルサス『人口論』観に関しては、『マルサス人口論の国際的展開』184-6、207-9頁を参照。ちなみに、実証主義者であったティボー（Anton Friedrich Thibaut, 1772-1840）は歴史法学派のサヴィニーが主張する経験主義に異を唱えていた〔『岩波西洋人名事典』（岩波書店、1956年）854頁〕。この点の詳細については、田村信一著『ドイツ歴史学派の研究』（日本経済評論社、2018年）第2章や、あるいは丸岡高司「ロツシャーの『歴史的方法』」『経済科学』53巻3号（名古屋大学経済学会、2005年）等を参照。
 - 5) さしあたっては、シュモラー（Gustav von Schmoller, 1838-1917）稿今野国雄訳「ロツシャー論」〔スピーゲル（Henry William Spiegel, 1911-95）編越村信三郎・古沢友吉監訳『社会主義と歴史学』（東洋経済新報社、1954年）所収〕196、205-9頁を参照。なお、ロツシャーの視野は実に数多な社会科学者の手になる諸著作ばかりではなく、フランスのレイナル神父（Guillaume Thomas François Raynal, 1713-96）やフンボルト（Alexander von Humboldt, 1769-1859）等による歴史書や旅行記にまで及んでいて、まさに圧倒される〔ロツシャー前掲訳書37、127、165、168頁、また、アメリカの政治学者であったレイラー（John Joseph Lalor, 1840/1841-99）が原典第13版（1877年）を英訳した William Roscher, *Principles of Political Economy*, 2 vols. (Chicago: Callaghan & Con., 1882) Vol. II, pp. 460, 463も参照〕。
 - 6) 例えば、James Bonar, *Theories of Population from Raleigh to Arthur Young* (London: Allen & Unwin, 1931) における様々な統計学者や社会哲学者をも収めた広範な視界を参看〔また、拙稿『マルサス人口論の源泉』（ユーリカ・プレス、2006年）5頁も参照〕。しかし本稿では、マルサス人口論の先行者に関するボナーによる考証にも立ち入らない。
 - 7) Roscher, *op. cit.*, Vol. II, p.384 n.9、また、同書 pp. 288-91n15も見過ごせない。
 - 8) ロツシャー著杉本栄一訳『英国経済学史論』（同文館、1929年）130頁、また杉山忠平訳『チャイルド 新交易論』（東京大学出版会、1967年）123、241頁。
 - 9) 杉本同上訳書174頁、また山田前掲訳書64-5頁も参照。
 - 10) 早稲田大学第3代学長（1918-21年）であった平沼の斯学における特徴については、猪谷善一「歴史派経済学者としての平沼淑郎先生」早稲田大学経済史学会編『平沼淑郎博士生誕百年記念誌』（1964年）51-72頁、並びに入交好脩「平沼淑郎著『通信教授経済学』の学史的地位」『早稲田大学史紀要』1巻1号（早稲田大学・大学史資料室、1965年）180-7頁等を参照。

- 11) ただし、ロッシヤーは第5版『国民経済の基礎』（1863年）に至り、「人口増加に関するマルサスの法則」という編を削除し、改称した第5編「人口」で人口理論、人口史、人口政策に分けて収録している〔猪谷善一「マルサス人口論の日本導入過程」『経済学紀要』創刊号（亜細亜大学経済学部、1966年）12頁〕。
- 12) 吉田秀夫著『日本人口論の史的研究』（河出書房、1944年）42頁。
- 13) 猪谷前掲論文16頁。
- 14) シュモラー「ロッシヤー論」201-2頁。
- 15) ボナーの寸伝は、とりあえずはマルサス学会編『マルサス人口論事典』（昭和堂、2016年）240-1頁を参照。また、一方でボナーは79年にアダム・スミス・クラブを創立し、「スミスの蔵書目録を史上はじめて編纂するという途方もない仕事に手をつけ」、ついに94年に成就させもしたのである〔山崎怜著『経済学と人間学』（昭和堂、1994年）113-4頁〕。
- 16) 言うまでもなく、Parson という語はコベット（William Cobbett, 1763-1835）が1819年5月8日に週刊誌『ポリティカル・レジスター』に掲載したマルサス宛ての手紙を想起させよう〔大前朔郎著『英国労働政策史序説』（有斐閣、1961年）234頁〕。しかしボナーはコベットやマルクス（Karl Heinrich Marx, 1818-83）のように〔ミーク（Ronald Lindley Meek, 1917-78）編著大島清・時永淑訳『マルクス＝エンゲルス マルサス批判』（法政大学出版局、1959年102、157頁）、マルサスの著作を激しく論難したわけではなく、むしろそれに畏敬の念を抱いていた。それゆえ、「坊主」という呼称は不適切かもしれないが、ここでは先行訳の題目を尊重、踏襲することとした（〔1〕上98頁、また〔2〕10頁も参照）〕。
- 17) 〔2〕序言12頁。
- 18) ウィンチ（Donald Norman Winch, 1935-2017）著久保芳和・橋本比登志訳『マルサス』（日本経済評論社、1992年）169頁〕。ちなみに、ヴィクセル（Johan Gustaf Knut Wicksell, 1851-1926）も1888年9月にベルリンの中央統計図書室で『業績』に関する読書ノートを作成している〔橋本比登志「ヴィクセル読書ノート：ボナー著『マルサスと彼の業績』」『熊本学園大学経済論集』4巻3・4号（熊本学園大学経済学会、1998年）90頁〕。
- 19) ボナー「マルサスの第一論文について〔1926年〕」〔高野岩三郎・大内兵衛訳『初版人口の原理』（岩波書店、1962年第23刷改版）227頁〕。
- 20) 〔4〕序言12-3頁。なお、ボナーはこの2版が日本語に翻訳されるに際しても、「少なからざる原文訂正を」訳者に願い出ている（〔4〕訳者序言1頁）。
- 21) プレンによるマルサス研究やその特徴については、ジョン・プレン著溝川喜一・橋本比登志監訳『マルサスを語る』（ミネルヴァ書房、1994年）156-9、169-70頁を参照。とくに、この訳書に収録されている第1講「マルサスの生涯と著作」は簡にして要を得た佳作である。また、プレンはマルサス家の家計収支を極めて微細に辿ってくれてもいる。例えば、マルサスが1804年から終始ロンドンのフリート街にあるホアレ銀行（Hoare & Co.）に口座を置き、そこから生活費や旅費その他の支出用に折々にハートフォード銀行（1807年創立）に振り込んだ金額等を詳細に分析している。一方、収入に関しても、東インド・カレッジからの手当（半年毎支給の年収500ポンド）に加え、1800年4月5日に亡くなった母（Henrietta Catherine Malthus）からの遺産金（3000ポンド）等を元手に減債基金用の終身年金（1806年4月から投資開始）、コンソル債（1806年3月から投資開始）、及びインド債（1807年6月から投資開始）からの利子収入や、ウェイルズビーの牧師補として代理人ヤング（Jonh Cole Younge, 1785/6-1852）から受け取っていた収入等々を割り出している〔John Pullen, "Further Details of the Life and Financial Affairs of T.R.Malthus", *History of Economic Review*, No.57,

- (Winter, 2013)]。これによれば、臨時のコンソル債の売買益を除いても、マルサスの年収は1806年の最低値でも1000ポンド弱で、1830年の最高時には何と約1500ポンドにも達している、それゆえマルサス家は上層の中流階級に属していたと目される。但し、ボナーはマルサスを「貧しき地方税納税者 (poor ratepayer)」とみなしてはいる（〔2〕434頁注）。
- 22) もちろん、ボナーが「『人口論』と『生涯』との双方を取り扱っているところの長崎の伊藤久秋〔1897-1980〕の1928年の充実した参考になる論文がある」と述べているように（〔4〕著者よりの序言7頁）、少なくない雄編が残されてきている〔伊藤前掲書375-95頁等〕。伊藤は欧州滞在時（1922-6年）にボナーと直に遣り取りして、ボナーの研究を凌駕せんと一再ならず試みている〔同書19、106、208、375頁〕。ちなみに、未完のマルサス書簡集に関しても、海外の研究成果やその進捗を拱手傍観しているだけでは、覚束ないであろう。その集成に向けてのさらなる地道な模索や試行が切望される〔塘茂樹「書評 柳田芳伸・山崎好裕編『マルサス書簡のなかの知的交流』』『マルサス学会年報』27号（マルサス学会、2018年）〕。
- 23) 『マルサス人口論事典』160-2頁を参照。なお、ボナーはサムナー (John Bird Sumner, 1780-1835)、チャーメーズ (Thomas Chalmers, 1780-1847)、及びコプレストン (Edward Copleston, 1776-1849) にも言及してはいるけれども（〔2〕18、52、58、431、497頁）、マルサスの神学思想との差異も窺知されるものの（〔2〕59、444-5、452、454-5頁）、ペイリー (William Paley, 1743-1805) の『道徳政治哲学原理』（1785年）や『自然神学』（1802年）からの影響が大であったとする（〔2〕52、65、67、371、452頁）。ただし、同時に、ボナーはタッカー (Abraham Tucher, 1705-74) の『自然の光明』からの母斑をも指摘している（〔2〕56頁註3、443-4、452頁）。ちなみに、マルサスが恩師であるウェークフィールド (Gilbert Wakefield, 1756-1801) やフレンド (William Friend, 1757-1841) から推奨されたとされる全7巻の『自然の光明』の内、まず1768年に4冊本（56年からの起筆）が上梓され、残る3冊本は遺稿（74年の脱稿）として78年に刊行された〔赤沢昭三「トーマス・ロバート・マルサス著『人口論』初版第18・19章について』『東北学院大学論集』124号（東北学院大学文経学会、1993年）169頁、及び永井義雄「ベンサム経済法学における政治経済学と幸福論』『経済系』第260集（関東学院大学経済学会、2014年）162頁注13〕。
- 24) この内実については、『マルサス人口論事典』50-1、96頁を参照。なお、ボナーは誰よりも早く初版『人口論』の神学章の「削除 (omission) は変説 (recantation) ではない」（〔2〕60頁、また74頁も参照）と把握して、中矢俊博著『ケンブリッジ経済学研究』（同文館、1997年）第1章はこの最終2章が2版以降の後続諸版で削除された点を実に多面的かつ綿密に考察して、その際にボナーの解釈を取り上げてもある〔同書48、54-9、66頁〕。また、小林時三郎（1919-75）も「マルサスの倫理思想は、自然神学にもとづいているといわれている。この方面のもっとも権威のある研究として定評のあるボナーの』『業績』と評し、『業績』をもって、「マルサスの総括的な研究書であり、マルサスの思想を取り扱っている点で、貴重な研究である…もういちどこれを顧みる必要がある」と論評している〔同氏著『マルサス経済学の方法』（現代書館、1968年）65、236頁〕。
- 25) ウォーターマン (Anthony Michael Charles Waterman, 1931-) の『革命、経済学、及び宗教：クリスチャン・ポリテイカル・エコノミー1798-1833年』（1991年）以降、改めてこうした研究視角は俄然脚光を集めてきていて、マルサスはその神学的見解を「思想の本質的部分とみなしていた…彼の人口に関する見解は、彼の神学体系と切り離しては十分に理解することはできない」〔プレ前掲訳書51頁〕という見地が今日ではすっかりと定着していると言

- えよう〔赤沢昭三「マルサスとキリスト教—特に彼の神学に関する最近の議論について—」『マルサス学会年報』第3号（マルサス学会、1993年）、同「トーマス・ロバート・マルサス著『人口論』初版第18・19章について」、及び溝川喜一「Pullen, J. M. のマルサスの『今世と来世』論」『松平記念経済・文化研究所紀要』16号（関東学園大学、1998年）を参照〕。にもかかわらず、19世紀のイギリスにおけるマルサス研究史の整理に際してボナーの研究が一顧だにされていないのは腑に落ちないし、残念でならない〔柳田芳伸・吉野浩司「【書評】 Gilbert Faccarello, Masashi Izumo, Hiromi Morishita ed., *Malthus Across Nations: The Reception of Thomas Robert Malthus in Europe, America and Japan* Edward Elgar Publishing, 2020.」『マルサス学会年報』第30号（マルサス学会、2021年）109-110頁〕。本稿執筆の1動機はこの欠を補いたいことでもある。
- 26) ボナーは「1平方マイル当たり」の人口数を念頭に置きながら（〔2〕165頁註2）、イングランド及びウェールズの全耕作面積をおよそ3600エーカーと、またエーカー当たりの小麦収量を28ブッシェル程度と見積もっている（〔2〕100頁、165頁註2、299頁）。ちなみに、1ブッシェルの小麦は当時54.36ポンド重量の2等標準小麦パンとなり、例えば、8人家族では週に10ポンド重量弱のパンを消費していた〔拙論「マルサスにおける必需品（小麦パン）と便宜品（靴下）」『長崎県立大学論集』54巻1号（長崎県立大学術研究会、2020年）28、31頁〕。なお、マルサス自身は人口増加の終着点では、「どの1ヤード四方の空間にも4人の人間が立たねばならなくなるだろう」と推算している〔柳田芳伸・姫野順一編『知的源泉としてのマルサス人口論』（昭和堂、2019年）16-7頁〕。
- 27) こうした姿勢は「条件付の親・人口主義者」と集約、別称されている〔プレンプ掲掲書55頁〕。ちなみに、マルサスは2版『人口論』以降の諸版の中で、創世記第1章28節の「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」との教えを転記し、賛意を示している（〔6〕IV2版15頁、〔7〕IV211頁）。
- 28) ボナーはよりの確に「功利主義（Utilitarianism）プラス国民性（Nationality）」（〔2〕475頁）と言い表してもいる。ちなみに、神学的視点からの「功利の原理」の使用については、既にペイリーが先鞭をつけていた〔永井前掲論文155、161、163-4頁〕。
- 29) ボナー本人も「極めて非マルサス的（un-Malthusian）結婚」の併存を確認している（〔2〕431頁）。
- 30) 『マルサス人口論事典』73、113、160頁を参照。
- 31) 柳沢哲哉「『人口論』初版における功利主義」〔柳田芳伸・諸泉俊介・近藤真司編『マルサス ミル マーシャル』（昭和堂、2013年）1章〕、並びに同「マルサスの功利主義」〔仙台経済学研究会編『経済学の座標軸』（社会評論社、2016年）はこの点を余蘊なく析出、検討した卓論である〕。
- 32) 『マルサス人口論事典』97-102頁を参看。なお、ボナーは「大制限（restrictive）法則」や「増加の法則（原理）」にも目配りしている（〔2〕31、55、156頁）。
- 33) マルサスの中流階級肥大化論については、さしあたり『マルサス人口論事典』84-6頁を、より詳細には拙著『増補版 マルサス勤労階級論の展開』（昭和堂、2005年）iv-v、4-5、26-34頁を参照。
- 34) その最たるは「独学の（self-taught）マルサス主義者」（〔2〕211頁）であったし、ボナーの目にはコールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）、サウジー（Robert Southey, 1774-1843）、及びシーニア（Nassau William Senior, 1790-1864）等もマルサス主義者と写っていた（〔2〕7、123頁）。また、ボナーは「新マルサス主義者は、初版『人口論』で解明され

た世界人口の『最終原因（final cause）』に関するマルサスの神学的形而上学的見解と一致しない」（〔1〕上116頁）ということを示して、新マルサス主義者は「ロバート・オウエン（Robert Owen, 1771-1858）の子であろう」（〔2〕36頁、また517、542頁、543頁註13も参照）と放言している。

- 35) 但し、別な機会には、マルサスの『人口論』以外の理論への諸貢献も、『人口論』と同じ最高位の水準にはないにしても、重要性において高いものであります。彼は地代論と価値論の古典派理論を起こして、両理論の成立に大きな役割を果たしたという名誉を受ける正当な権利もっています。」と講演してゐる「ボナー他「マルサス論 [1935年]」〔スピーゲル編越村信三郎・長洲一二監訳『古典学派』（東洋経済新報社、1954年）所収、63頁〕。
- 36) 確かに、初版『人口論』での用例は1ヶ所のみであり（〔5〕48頁）、6版における使用例に関しては、拙論「マルサス『人口論』の一考察」『経済論集』32巻4号（関西大学経済学会、1982年）281-5頁や、関陽子「C・ダーウィンの自然観」『エコ・フィロソフィ』6巻（東洋大学学際研究イニシアティブ、2011年）を参照。
- 37) ボナーが「生存闘争は露命（bare life）のための闘争である時には、進歩（progress）に導かない」（〔2〕469頁）と確言しているように、「最低層（lowest stages）における闘争」（〔2〕69頁）や「露命のための闘争」（〔2〕544頁）についても云々する要はなかろう（〔2〕133-4、148、323頁も参照）。ちなみに、ボナーは「生物学的問題は研究対象外である」と釘を刺してもいる（〔3〕339頁）。
- 38) 斎藤隆子「マルサスとダーウィン：自然神学から自然選択へ」『経済科学』67巻3号（名古屋大学経済学会、2020年）76-7頁等を参照。
- 39) 『知的源泉としてのマルサス人口論』12-3頁。
- 40) もちろん、ボナーは「より劣等な食物」（〔2〕192頁）を中心とした「単純な食事（simple diet）」（〔2〕280頁）から「動物性必需品」（〔2〕136、370頁）に基づいた「最良の食物」（〔2〕439頁）までを視野に入れている。
- 41) 詳細には、拙論「マルサスにおける必需品（小麦パン）と便宜品（靴下）」21-33頁を参照。ちなみに、ボナーは「不健全な家（unwholesome houses）」あるいは「最良の衣服、最良の家屋」に説き及んでもいる（〔2〕438-9頁）。
- 42) 18世紀のイギリス経済思想家たちがどのような奢侈論を展開していたかについては、鈴木康治著『消費の自由と社会秩序』（社会評論社、2012年）等によって概観できる。また、マルサス以後の19世紀イギリスにおけるこの類の論議に関しては、David Edward Charles Eversley, *Social Theories of Fertility and the Malthusian Debate* (Oxford: Clarendon Press, 1959), pp.212-65を参照。
- 43) 入江奨「マルサス体系における真実労賃因子としての奢侈論」『松山商科大学創立50周年記念号』（松山商科大学、1984年）は、『業績』をも1手掛かりとしながら〔同論文9-10頁〕、マルサスの諸著作から奢侈に関連する章句を周密に抜き出し、整理、考察しようとした労作である。
- 44) 入江同上論文23-4頁註47、及び前掲拙著70-4頁。但し、ボナーはマルサスが余暇の意義（知識や精神的進歩を促進する）を認めていたことには何度も言及している（〔2〕16-7、25、54、110、327、411頁）。
- 45) 入江同上論文3-10頁。また、「スミスは消費財を必要性の程度に応じて必需品・便宜（安楽）品・奢侈品の三つに区分した一スミス以前は必需品以外の全てを奢侈品と見なす傾向が支配的であった一が、マルサスもその区分を継承している。」と説示されてもいる〔中澤信

- 彦著『イギリス保守主義の政治経済学』（ミネルヴァ書房、2009年）139頁〕。
- 46) ちなみに、スミスの用いた必需品に関してではあるけれども、「第一に、何が必需品にあたるかは時代と社会とによって異なる。第二に、それにもかかわらずある時代の特定の社会のなかでは、必需品の、それゆえまた奢侈品の、ある程度の一般的な定義つまり社会的含意が成り立つ。第三に、その財貨が必需であるという含意は、それらの諸財貨が欠ければ、その社会で暮らしていくうえで最低水準の社会性（体面）を維持できないということにある。」と要説されている〔竹本洋著『「国富論」を読む』（名古屋大学出版会、2005年）36頁〕。
- 47) スミスによる「境遇改善志向」の行き届いた解明については、竹本同上書第2章第3節を参照。なお、私見では、マルサスのよる生活資料の区分はスミスと共にグルネ(J.C.M.Vincent de Gournay, 1712-59)・サークルの1人でもあったビュテル・デュモン(G.M.Butel-Dumont, 1725-88)の『奢侈論』（1771年）等からも負っているように思われる〔米田昇平著『欲求と秩序』（昭和堂、2005年）363-84頁、また同書152-3頁注2や『マルサス人口論事典』108頁も参照〕。
- 48) この文言はペイリーの『自然神学』の叙述と酷似していて（〔6〕IV174頁注1）、マルサスがここから摂取したことを想像させる〔橋本比登志著『マルサス研究序説』（嵯峨野書院、1987年）169頁〕。
- 49) とはいえ、決してボナーをその先達に祭り上げようというのではない。少なくともリード(Samuel Read, 1779-1855)が『経済学』（1829年）において「愉楽の標準」よりもより多く（4度）「貧窮の標準」に関心を払っている〔拙論「サミュエル・リードのマルサス批評」飯田裕康・出雲雅志・柳田芳伸編著『マルサスと同時代人たち』（日本経済評論社、2006年）所収、238頁、248頁注8〕。
- 50) ボナーはその人数を「200万人」と概算しつつ（〔2〕422頁、前掲拙著64頁注27も参照）、「受救民 (pauper) 階級」（〔2〕432頁）や「貧困 (poorer) 階級」（〔2〕111頁）にも言い及んでいる〔前掲拙著15-7、27、50頁、並びに『マルサス人口論事典』84-6頁をも参照〕。
- 51) 但し、ボナーの所論に沿えば、マルサスは「国民の健康の改善を評価するのは疑いもなく困難であった」と解していた（〔2〕252頁）。ちなみに、マルサス自身は間違いなく靴下を「便宜品」の1つとして挙げている〔拙論「マルサスにおける必需品（小麦パン）と便宜品（靴下）」34-5頁〕。
- 52) 拙論「マルサスにおける奢侈と道徳的抑制」『千里山経済学』20号（関西大学大学院、1987年）65-7頁や、前掲拙著211-2頁等を参照。
- 53) 柳田芳伸・山崎好裕編『マルサス書簡のなかの知的交流』（昭和堂、2016年）109頁注33、及び拙論「マルサスにおける必需品（小麦パン）と便宜品（靴下）」17-9頁等を参看。なお、「愉楽の標準」そのものはステュアート (James Steuart, 1713-1780) の「洗練への嗜好 (a taste for refinement)」との類似を感じさせるし〔ステュアート著小林昇監訳竹本洋他訳『経済の原理：3・4・5編』（名古屋大学出版会、1993年）660頁〕、それはまた精妙で感性的なヒューム (David Hume, 1711-76) の「趣味の標準 (Standard of Taste)」にまで遡れるのかもしれない〔ヒューム著田中敏弘訳『道徳・政治・文学論集』（名古屋大学出版会、2011年）192-208頁、また濱下昌宏著『18世紀イギリス美学史研究』（多賀出版、1993年）184-7頁や、大河内昌著『美学イデオロギー』（名古屋大学出版会、2019年）第3章も参照〕。また、もちろんヒュームが「生活の愉快品 (pleasures) と便宜品における洗練」と言い表しているのも黙過できないであろう〔同訳書226頁〕。
- 54) 〔10〕306-7頁、〔12〕48-50頁を参看。ちなみに、『綱要』は『大英百科事典』の補遺であ

- る「人口」の抄略 (abridgement) である ([2] 『業績』 114頁)。
- 55) ボナー他「マルサス論 [1935年]」64頁。
- 56) 前掲拙著257-61頁、並びに『マルサス人口論事典』110頁等を参照。
- 57) 同上拙著259-63頁を参照、またメアリー・ペイリー・マーシャル (Mary Paley Marshall, 1850-1944) 著松山直樹訳『思い出すこと』(晃洋書房、2021年) 66-7頁をも参考。
- 58) マーシャル前掲訳書Ⅳ 7頁。
- 59) マーシャル同上訳書Ⅰ 3-4頁。
- 60) ボナーが別な個所で健康並びに「徳と幸福とが終極点であり、富、人口、及び力はこの手段に他ならない」([2] 312頁)と説いていることを勘案すれば、マルサスは富と「健康で、有徳な、かつ幸福な人口」との、あるいは「人口の質」([2] 161、225頁)との関連の学を考究していたと言い換えよう([2] 291頁)。
- 61) ボナーは「古代の愉楽の標準」([2] 166頁)も思い浮かべているし、かつ「愉楽の国民的 (national) 標準」([2] 244頁)は国別に異なっていて([2] 169、196頁)、また同一国内であっても上・中流階級はその「高い生計の標準」([2] 404頁)を誇示し、維持しようと努めていると想定している([2] 237頁)。
- 62) 中澤前掲書6章が鮮明にかつ隈なく析出してきている。ただ、ボナーによれば、マルサスがウィッグの1小冊子とされる([2] 11頁)未刊の『危機』(1796年)をディブレット (Debrett) なる人物に送付し、その受け取りを拒否されたとあり [ボナー「マルサスの第一論文について」228頁]、その真相の解明が待たれる。
- 63) なお、マルサスはウィッグ党フォックス派の下院議員ウィットブレッド (Samuel Whitbread, 1764-1815) との私信の遣り取りを通して([2] 466頁、また47、298、428頁も参照)、彼の教区学校法案を支持している [『マルサス書簡のなかの知的交流』69-70頁、87頁注52を参照]。
- 64) 前掲拙著52-7頁、並びに296頁注60を参照。
- 65) 竹本前掲書28-9頁。ちなみに、「民衆教育の徹底した理論はマルサスに起源がある」と評釈しているアレヴィ (Élie Halévy, 1870-1937) はスミスの教育論に関連して、労働貧民、すなわち、「大多数の者の利益のために、分業の結果、少なくとも1つの点で重大な欠陥を有する分業の結果を教育により矯正することが、国家にとって義務となる。」と説明している [アレヴィ著永井義雄訳『哲学的急進主義の成立 (1901-4年) I-Ⅲ』(法政大学出版局、2016年) II 130、135頁を参照]。
- 66) より正確には、マルサスは2版『人口論』での妻と6人の子の家族への手当支給から、3版以降での妻と5、6人の子供への支給に変更している [柳沢哲哉「マルサスにおける家族と救貧法」『知的源泉としてのマルサス人口論』所収、57頁、及び同「マルサス『人口論』における救貧法批判の論理」『マルサス学会年報』24号 (マルサス学会、2015年) 9-10頁、25頁注12]。ちなみに、現今では、救貧法改革論の観点から、旧来放置されてきた3版と4版との間に存する微細な異同に照射し、吟味しようとする貴重な試みの萌芽にも接しえる [柳沢哲哉「マルサス『人口論』における救貧法批判の論理」『Working Paper Series』No.3 (埼玉大学経済学部、2012年) 4頁、21頁注4、並びに柳田芳伸・田中育久男訳「マンクの救貧法に関する考察」『長崎県立大学論集』54巻3号 (長崎県立大学術研究会、2020年) 74-5頁注30]。こうした例に見られるように、ボナーによる重厚な研究もその綻びを呈し始めてはいるけれど、それは「経済学のような社会科学に合って、全然非難の余地のない定義を見出すことは、なお不可能である」([2] 293頁、また364-8頁や [11] 12-3頁も参照) と同等

- 事と解すべきであろう。
- 67) 前掲拙著51、77-8頁。
- 68) ボナーはマルサスがまさかの危難に陥った貧民への「施療 (medical aid)」をも思い浮かべていたと指摘している ([2] 470頁、また [6] IV121頁を参照)。
- 69) ボナー他「マルサス論 [1935年]」63頁。
- 70) その仔細に関しては、アレヴィ前掲訳書Ⅲ72-4頁を参照。
- 71) アレヴィ前掲訳書Ⅱ127頁。
- 72) ボナー他「マルサス論 [1935年]」61頁、また、入江奨「マルサス『人口論』把握の諸類型」『人間と社会の諸問題』(松山商科大学、1979年)所収、23頁も参照。ちなみに、ボナーのこうした見地を分有して、『人口論』を読み返そうとしたマックリアリー (George Frederick McCleary, 1867-1962) はまさしく公衆衛生畑の専門家で、しかも乳幼児死亡の低下に寄与した実績を有していた [『マルサス人口論事典』270頁]。
- 73) 林恵海著『人口理論：研究と方法』(刀江書院、1930年)110-33頁。ちなみに、人口動態平行の法則はベルティヨン (Jacques Bertillon, 1851-1922) がギユイヤール (Achille Guillard, 1799-1876) の『人類統計学要義』(1855年)を継承しつつ、『フランスの人口減退』(1911年)において集大成したもので、「婚姻率、出生率、死亡率が相応じて高低大小し、相平行して昇降増減している現象を法則化した理論」である [同書84頁]。
- 74) 前掲拙著87-8、101-5頁。
- 75) とはいえ、マルサスの親・人口主義はジュースミルヒの人口増殖主義とは大変異なってもいる。例えば、マルサスは次のように論述している、すなわち、「ヨーロッパは今日なお人類の増殖に好都合な法律を必要とする状態にある…ジュースミルヒもこれと同一の見解を抱いている。…死亡こそが結婚に対する一切の奨励の中で最も有力であることが、明らかにわかる」([6] II75頁)と。ちなみに、ドイツ語の心得を余り習得していなかったマルサスが実際に利用している『神の秩序』([6] II22頁注5)はジュースミルヒの娘婿の牧師バウマン (Christian Jacob Baumann) によって刊行された4版 (1775-6年)の6刷版 (1798年)であった [岡田實著『現代人口論』(中央大出版部、1996年)180頁を参照]。なお、その研究視角を異にするけれども、ジュースミルヒとマルサスとを比較照合しようとする試みを散見できる [ヨーン (Vincenz John, 1838-1900) 著足利末男訳『統計学史』(有斐閣、1956年)266-7頁、270-4、279-81、313、315頁、及び内海健寿「マルサスの神学思想と私有財産制論」『松平記念経済・文化研究所紀要』12号 (関東学園大学、1994年)7-17頁]。

本論で既述したように、James Bonar, *Parson Malthus*, Edinburgh, 1880, pp.28-55の拙訳を附録として付している。それは、偏に川西正鑑 (1897-?) [図4.を参照]の先行訳の欠を補い、上記の小冊子を完訳させるためである。ノールズ (Lillian Charlotte Anne Knowles, 1870-1926) 著『産業革命史論』を1928年に翻訳・刊行した川西は工業管理論及び工業経済学の研究を深めるために文部省在外研究員として1928年3月からの1年間イギリスとドイツとに渡った [経済地理学者にして、東洋大学の第20代学長でもあった川西の経歴については、岡田俊裕著『日本地理学人物事典：近代編2』(原書房、2013年)62-8頁を参照]。その在外時であった28年11月中頃

図4. 川西正鑑



(注) 岡田俊裕著『日本地理学人物事典：近代編2』（原書房、2013年）62頁より。

にロンドンの古書店で本稀書に逢着し、帰国後の31年6月に「坊主マルサス(上)」と題して『拓殖大學論集』第1巻第2号91-118頁に記載したのである。しかしその前年の4月には、堀・吉田訳『マルサスと彼の業績』〔図5.及び図6.を参照〕という凱切な邦訳書が公刊されていて、結果的に後半部の訳出を断念されたものと推断される。なおこの川西訳では原本にはない多数の訳注が見られるが、それは概ね第2版『業績』の原典に付されている脚注に準拠している。

図5. 東北帝国大学時代（1929年）の堀経夫（向かって後列の右端）



(注) 堀経夫『私の小写真集』(1956年)より。

図6. 堀と吉田が邂逅した東北帝国大学の法文学部（1号館）



(注) 筆者所有の古絵葉書より。

ジェームズ・ボナー著『坊主 マルサス（下）』（1881年）

凡 例

1. 訳出に際して、原文中のイタリック部は太字で示した。また dash (—) は基本的に省略し、前後の文脈との関連から訳すよう努めた。
2. 訳文中の亀甲内は訳者の判断に基づき適宜補った部分である。
3. 原文では皆無である訳注は門外漢の読者への訳者による顧慮から付したもので、上付けの通し番号順で示している。それゆえ専門家には不要なものも含有している。

ジェームズ・ボナー著『坊主 マルサス（下）』（1880年）

James Bonar, *Parson Malthus*, Edinburgh, 1880, pp.28-55.

マルサスの前半生はほぼ18世紀後半と重なっていて、イングランドの産業革命の最盛期とまさに符合している。マルサスはパリ条約〔1763年2月10日に締結され、これにより七年戦争（Seven Years' War）が終結〕から3年後の1766年に生まれた。対外戦争に暫しの終止符が打たれ、貿易が恐れずに開始されていった。北部イングランドでの石炭や鉄の発見と紡績や織物における発明とが密接に関連し合い、最貧州が最も豊かな州へと変容せられ、政治的均衡を崩していった。新興科学の化学は有効性を試行し始めていた。ウェッジウッド（Josiah Wedgwood, 1730-95）は陶器を完成させつつあった。ブリンドリー（James Brindley, 1716-72）は運河を掘削し、テルフォード（Thomas Telford, 1757-1834）は道路を敷設し、ワット（James Watt, 1736-1819）は蒸気機関を建造しつつあった¹。イングランドは後世になり牧草地と化していったけれども、ローマ時代のイングランドは穀倉地であった。いままでは外国貿易の中枢であると共に機械や製造業の国（land）へと変容しつつあった。言い換えれば、私たちが一層良い暮らしを立てつつある影響を受けて産業的変貌を開始したのである。終極ではないであろうけれども、歴史上、当時までが頂点で、眩いばかりの改善で満ちていた。ところがこの変化の初期においても、その害悪はその恩恵にほぼ劣らないほど存在していた。失職した働き手（workmen）の苦難や新たな工場制の無秩序は家庭労働から仕事を奪い、「製造業者（manufacturer）」という言葉から本来の語源²を忘失させ、一時的なものとはいえ真の害悪となったの

である。並外れた徳が絶無である時代にあつては、それが拡張的な製造業による民主主義的潮流と合流して、容易に社会的動揺を引き起こしえたのである。その結果、イングランドはホイットフィールド（George Whitefield, 1714-70）やウェスリー（Jonh Wesley, 1703-91）に主導された福音主義運動³のお陰でそれからある程度免れえたのであるが、また同時に宗教的無関心や政治的暴動にとっては致命的でもあった⁴。厄介な干渉（meddlesome）関税や海外食物を排除せんとする無益な試み⁵は100年より前に消滅されるべきであった。しかしマルサスの少年時代には、それらに抗したアダム・スミス（Adam Smith, 1723-90）の声（『国富論』1776年）は「砂漠で泣く人の声」⁶であった。物価がパリ条約の後に騰勢であったことが人口成長（growth）に起因していようと、また銀価値の下落からであろうと、はたまたポータランドにおける災難によっていよう⁷と、その救治策（remedy）は自由貿易と関わっていないというのが一般的同意であった。貧民は安価な穀物を有してはいなかったが、大きな手当に預かることはできた。新法⁸に則して、1723年〔正確には、「1722年」〕に貧乏（destitution）に関する賢明なワークハウス・テストが導入され、意図的な（willful）貧困を防げるようになったけれども、その条項は1782年に撤廃され、新たな厳格さがその古い手ぬるい条項に置換され、いつもの結果をもらした⁹。この世紀末にはヨーロッパ戦争の災厄がここに加わり、政治的改革の潮流が40年間（1792-1832年）後退した。フランスの改革が過度となっていたので、英国の改革は第1歩を踏み出せないままであった。

もしヴォルテール（François Marie Arouet Voltaire, 1694-1778）とルソー（Jean Jacques Rousseau, 1712-78）がそのための道を用意していなかったなら、フランス革命はとても異なっていたであろう¹⁰というのは歴史家にとっての1陳腐事である。飢え（hunger）と新思想とが変化の2つの支持母体となり、絶えず相互に一緒になって最も後押しした。飢えは人々に行動を起こさせ、また新思想は人々に法制定の根拠を与える。フランスでは、危機が1789年に到来し、新思想は程なく探し出された。プラトン（Plato, 428/427-348/347 B.C.）からモア（Thomas More, 1478-1535）までの、及びルソーからラスキン（John Ruskin, 1819-1900）に至る空想的社会改良家たちは常に唯一の計画を企画した。彼らは個々の時代に関する由々しき大罪を作り出し、反対者に入り込んだ。それは人々が天国を想像する際に、不愉快が取り省かれた故郷を思い浮かべるかのようなものである。母国における不平等ゆえに、ルソーが人々の前に平等という幻想を差し出した時、フランス人たちは惑溺させられてしまった。つまり「自然の状態」とはフランスの正反対の状態であった¹¹のである。哲学的には、革命論の先祖はロック（John Locke, 1632-1704）まで遡り、かつその

思想が海峡を渡り、生誕地を再訪することとなったのである。

たといギリス人が目に見える理想郷を、あるいは少なくとも理想的田園(Arcadia)〔ペロポネサスの1地方で、ギリシア人の理想郷〕をアメリカに有していなかったとしても、イングランドには社会のあらゆる階層に新思想を流布するに足る飢えがあったのである。このことによって、「革命が生んだ寵児 (a child)」であるゴドウィン(William Godwin, 1756-1836)の著作は1793年に大いに成功を取めたのである。それはただ単に平等というフランスの学説に関する良き英語版の記述にとどまらず、その時代に向けての1冊であった。それは単なる翻訳ではなく、著作自体に活力があった。ルソーやレナル¹²(Guillaume Thomas François Raynal, 1713-96)の思索では、万民の平等のために普遍的な改良を犠牲にする必要があった。両者の理解(もしくは理解と思しきもの)では、2つは併存できず、平等はとても大きな利益(good)であるので、あえて野蛮状態に戻ってまで入手しようとした。だから、おそらく両者はゴドウィンに比べるとずっと論理的であった。他方、ゴドウィンの思想は少なくとも両者のものよりは高邁であった。彼の考えでは、文明化と平等はまったく共存しえた。つまり彼は全員が真に文明化された暁には、人々は自ら一致して平等を復活させていくと考えたのである。彼は万事を暴力ではなく理性に託していたから、彼の著作は理論上では一切無害であった。しかしその性向は常に危険視された。というのも、本書の英国政体への自由奔放な批判が英国国民には馴染まなかったからである。加えて、イングランドの人々はいつも思想と人格とを混同し勝ちでもあった。自由がイングランドとのアメリカ「独立戦争」という形をとった際、人々は自由を偏愛しなかった。たとえ人々が1789年に平等を歓迎したとしても、恐怖政治の後にそれをもとうとはしなかった。人々はバーク(Edmund Burke, 1729-97)を求めてフォックス(Charles James Fox, 1749-1806)を切り捨てた¹³。マルサスが著述したまさにその時には、イギリス人民大衆はこの新思想への熱狂を失っていた。ナポレオン(Bonaparte Napoléon, 1769-1821)が〔97年に〕イタリアを侵略し、エジプトにいるわが国に対峙した時〔98年7月〕、自らを改革者と呼ぶには、またウィッグ党员とさえ呼ぶには相当な覚悟を必要とした。ピット(William Pitt, 1759-1806)は戦争という英知を信じない人たち(persons)のすべてを扇動者とみなしたのである。

当時の改革の必要を無視していたとはいえ、このピットでさえ、苦境の存在を黙視するわけにはいかなかった。1795年には深刻な不足が生じた。戦争価格は飢餓(famine)価格となった。ウィットブレッド(Samuel Whitbread, 1758-1815)氏やその他の人々は「何かをなす」べきであるとしたし、またピットが(1796年〔11月〕)

に提案した救貧法修正案も難航していた。ピットが提起していたのは定住法をもっと自由な方針で修正し、働く人々（working-men）を別な方法で支援して、「救貧法の本来の自浄を回復させること」であった。こうした別な方法の1つが当時の救貧法制度と共に友愛協会や勤労学校を組織するという無害な類の試みであった¹⁴。しかし他の人たちは大家族である所で貧民救済をより多大にすると人口成長を招来させると抗弁した¹⁵。すなわち、こうした場合には、「私たちは不名誉や恥辱の原因に代わって権利と名誉という事柄を救援してしまおう。これによっては大家族を祝福してしまい、それを災いの種とはしないであろう。このゆえに、結末として、自らの労働で備えることができる人たちと、多数の子供でわが地を富ませてから自分たちの扶養への援助を要求する人たちとの間に厳密な（proper）区分線を引こう。」¹⁶（『下院議事録集』33巻、1796年2月12日、703頁以下、また同32巻、687頁以下も参照）と。

1796年でのマルサスはこうした事柄に関するピットの堅固不動に疑義を挟まなかった。〔未刊行の小冊子〕『危機』¹⁷には異論の暗示はない。しかし1798年になると、彼は新たな見方を取り、人口に関する徵募官の見解¹⁸をとることができなかった。ゴドウィンとコンドルセ（Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat, 1743-94）は人口がいかにして急速過ぎる成長をせずに入れるのかを分かり易く示すのに失敗しているが、仮に彼が両者に対して好例を呈示していたならば、救貧法がより急速な成長をもたらすと提起したピットに対して一層優れた好例をもったことであろう。しかも2人の計画は単に机上の空論で、それらを実現させる機会はなかった。一方、ピットが過半数を握れば、その胸底にあった何らかの方策を実現させたであろう。とりわけ、この3番目の方向からの危険がいまにも起こりそうであった。けれどもマルサスはそのことに対して新たな論議を全く必要としなかった。彼は単にその古い論議の周辺に立ち返り、この新たな敵に面してもその銃口を向けるだけで良かった。すなわち彼は、「結婚を奨励する必要はない。政府が人口成長をより急速にする必要はない。神が肉をどこで贈ってくれようとも、主はすぐさまそれを頬張る口を送り出すであろう。だから、もしもあなたが人為的に奨励して肉を増加しないまま口を増加するなら、あなたは単に人々を餓死へと1歩近付けるだけであろう。頑健な人口（numbers）が強さであるなら、飢えつつある人口は弱さである。」と述べたのである（〔5〕79-80頁、及び〔6〕I147頁）。

こうした日常平凡事は当時では1つの矛盾であった。18世紀末のイギリス下院においてさえ、どの政党も英国の働き手の地位についての統一見解を有していなかった。ウィットブレッドは常に地方税（rates）、あるいはその他の国家の介入によっ

て労働者を助ける何らかの対策（measure）を手元に用意していた。事実、〔ピット〕首相が自ら有名な対策を約束したのはウィットブレッド法案¹⁹の1つに反対する際においてであった。フォックスは新しい経済学説を理解した態度を見せず、どちらにも与することができた。アダム・スミスを称賛したピット²¹、—フォックス、コンドルセ、及びスミスへの忠誠を一切認めなかったゴドウィン（1796年版『政治的正義〔3版〕』第8編 viii 章508頁）〔ウィリアム・ゴドウィン著白井厚訳『政治的正義（財産論）』（陽樹社、1973年）93頁〕、以上の全員が一樣にこのことに暗かった。にもかかわらず、マルサスはどこでその見方（light）を手に入れたのか。手短には、当時高名この上ない著者であったアダム・スミス、プライス（Richard Price, 1723-91）、ウォーレス（Robert Wallace, 1697-1771）、並びにヒューム（David Hume, 1711-76）からである。「古代国家の人口稠密」は半世紀にわたって博学で古物好きの随筆家にとってのうってつけの狩場であった。例えば、ウォーレスは古代の優位を主張した（『古代及び現代の人類の数についての論考』1753年）、デイヴィッド・ヒュームの方はいつもの正確な先見の明でもって近代の優位を説いた（『古代国家の人口稠密論』）。この論争自体はその実際よりも人々を人口の課題（subject）に関する真相に近付けたと想定されているかもしれない。マルサスに残されたのはかなり有利な観点からヒュームの蓋然性を確実性へと転換することであった（後続版『人口論』I編xiv章、また初版『人口論』iv章）。マルサス以前の種々の著述者による露払いや前触れが彼の仕事（task）を容易にしたに違いない。別な手助けや「先駆け（anticipations）」も事欠かなかった²²。ウィルト州の牧師補であったジョーゼフ・タウンゼンド（Joseph Townsend, 1739-1816）は逸早く1786年に『救貧法論』を書き著わし、後世の私たちの時代になって始めて受け入れられている慈善や貧民救済に関した一連の賢慮について見事に記述している。こうしてマルサスはなしうる限りの最良の方法でタウンゼンドの著作の所見を録している。彼は主要なヨーロッパ諸国の人口を入念に探究した際に、タウンゼンド氏の『1786-7年 スペイン旅行記』〔1791年〕が彼のなすべき仕事を既に成就しているという理由からスペインを省略している²³（後続版『人口論』第7版II編vi章、例えば、〔6〕II130頁）。

したがって『人口論』は無からの創造という意味では独創的ではなかったけれども、『国富論』と同じく独創的であった。どちらの書においても著者は自分の先行者たちから大半の文言（language）を吸収し、また数多の思索さえも撰取した。とはいえ、彼は先行者たちにあっては達成されていないとみなした。彼はそれらをその関連性、その大局観、及び広い意味で理解した。文言の同一だけで、あるいは思索の部分的一致だけで「驚嘆すべき先駆け」とみなしてはならない。というのも、

それらの1つが論理的脈絡から切り離されて引用され、その著述者が一貫した前提を念頭に置いている議論の一部でない時には、同じ言葉が同義を双方の著者に伝えるわけではないからである。アダム・スミスの場合、ノース (Dudley North, 1641-91) 卿、ないしはマカロク (John Ramsay McCulloch, 1789-1864) や歴史家たちが列記した驚嘆すべき先駆けたちのいずれかと対比すれば、このことは真実となろう。ジュルダン (Jean-Baptiste Jourdan, 1762-1833) 氏 (Mons) が散文を知らないまま雑談したように、彼らは自由貿易を口にしたのである。彼らの推理は自由貿易まで達しない、したがってそのことから推断を下しえない。アダム・スミス自身の場合、彼がマルサスの先駆者とみなされるなら、同じことがまったくの真実となる。彼は自分自身の一般的諸概念 (generalizations) を十分に会得している。推理がそれらにまで達しえれば、その人はそれらから推断を下しえる。しかしスミスが「あらゆる種 (species) の動物はその生存手段に比例して自然に増殖する」(『国富論』第 I 編 viii 章36、2)²⁴ [水田洋訳『スミス 国富論』(河出書房、1965年) 上73頁] と言う時、マルサスを「先駆けた」わけではない。その章句 (phrase) は1章句以外の何物でもない。マルサスはその至要な意味を知らないし、また推理がそれにまで達しないので、それから推断する試みを殆どなしていない。反対に、マルサスは1つの一般原理をしっかりと固持してきたので、簡単な推論 (corollaries) という方法で多数の従属的な問題を解くことができている。他の人たちは救貧法や古代国家の人口稠密についての特殊問題に正しい答えを与えてきたかもしれない。マルサスはこれらすべての答えがどうして正しいに違いないのかという理解しうる1つの理由を示した最初の人である。

彼はこの謎解きによって成功を取めたのである。ゴドウィンの『政治的正義』が体系的であったから奏功したように、混乱を秩序立てたゆえに功を奏したのである。彼の結論が紛れもなく悲惨 (sadness) であったからこそ、ある注意を引いたのである。彼の読者の大部分は彼が自分たちの希望を取り去ったので敬愛したのではなく、彼が自分たちに新たな見方を差し出してくれるので敬愛したのである。悪疫や飢餓については、それらがどこからやって来るのか、またこの世に何をなすのか知られてからは、その漠たる恐怖は喪失されていく。たとえ結婚の欲望自体が害悪であるとしても、それについての真相を知るのは良いことである。無知はそれが全体を覆っている所でのみ至福でありえるに過ぎない。つまり、必要性 (necessity) は部分的であり、自発的な (wilful) 無知は永続的な不安であって、いわんや愚人の楽園ではないのである ([7] IV255頁も参照)。

こうした場合での真相は全然悲惨ではなかった。マルサスは『人口論』(1798年

版)の最後部で1つの議論を詳説し、その後も後続諸版において現世での一層の適用を再説した。彼はペイリー(William Paley, 1743-1805)やキリスト教護教論者の風を用いて、形而上学的な方針で人口原理の「真(final)因」を見つけ出そうと試みている。それは約20年後にその討論を新転換させた際のサムナー(John Bird Sumner, 1780-1862)主教²⁵に先行したものであった(『天地創造の記録』1816年)。その論点はこの原理が生み出す苦悩(suffering)と神の善意とをどのように調和するかであった。マルサスの答えでは、困難は害悪の一般的問題にとっての1部分に過ぎない、というのもこの部分と残部との差異はこうした際にその諸原因がより遠方まで見抜かれることにあるからである。したがって、われわれにとっては神の人間に対する態度(ways)を正当化の方が容易である。「害悪が存在するのは絶望ではなく、活動を創造するのである」([5] 269頁)。神から自然へとではなく、自然から神へと推理していくべきなのである。ゆえに、神がどのように動かされているかを知ろうとすれば、自然がどのように作用しているかを観察しよう。そうすれば、自然とは感覚あるすべての創造物を長くて、かつ骨の折れる過程を通して送り出し、それによって創造物は新たな性質と力を取得し、おそらくは現世で有しているよりもより良い地位に適合していくのである。だから多分、この世といまの人生は「神の力強い過程」であり、それは実際のところ単なる人間の「試練」のためではなく、無機物の無感覚や腐敗からの人間精神の「創造と形成」のためもの²⁶である([5] 244頁)。困難は才能を生み出す([5] 254頁)。「精神を最初に覚醒するのは肉体の欲求である。幼児の知性を喚起し、野蛮人の分別を鋭くするのはまさしくこれらである。閑暇ではなく、必要が発明の母なのである。

ディオファンテスよ、ただ貧しさだけが、諸技術(テクネー)を目覚めさせるのである²⁷。

ロックは正当であった。苦痛を回避しようとする欲求は喜びを見出そうとする欲求よりも一段と強いのである。このようにして、害悪は苦痛のゆえに善へと導く一すなわち、害悪—は努力を創造し、また努力は精神を創造するのである²⁸。これが通則である。あらゆる害悪の中で最も由々しき1つである食物の欠乏が善へと導いているのはその特殊な1例である。地球が食物を労働の報酬で、少量のみを生産すべきものと考案することによって、神は人間的進歩への永久の拍車をを用意したのである。これは人口の謎を解く鍵である。元来人間は飢えが1人のユリシーズ²⁹(Ulysses)にさせるまで安逸を貪る人(lotos-eater)である。何故に彼は事物の最頂点

や栄冠を苦勞して達成すべきなのか。その主因は、もし苦勞を惜しめば、生きていけず、その安逸郷は忽ち過剰な人々で溢れ、その結果、再度その小帆船を出航せねばならないからである。「精神を最初に喚起するのは肉体の欲望である」。けれども一旦喚起されれば、その精神は程なく肉体以上の要望を見つけ、知性や文明化の発展が無限の類で進行するのである（〔6〕 I 107頁）。人々は苦惱しえるからではなく、自らを苦惱から救うのに目覚めるために、その食物より急速に「増加する傾向にある」のである。こうしたすべての通則の部分的害悪は一般的善の中に吸収される。また一般的善は2つの方法で入手される。人間性が発展されることと、この世の資源が開発されることとである。自然の不変が推理する基礎であり、かつ人間が不変の法則に立脚して予測を立てるよう余儀なくされた場合のみ、（そうできた場合と同様に）人間の理性を引き出せるであろう。2つ目の局面では、「この世が人で溢れ返るに違いない」。もし野蛮人たちがその食物のすべてを沃土であるある中心点から入手できていたなら、地球の大半は荒地のままであったであろう。しかしどんな入植地も無制限の人数増を扶養することはできない。人々が余地と食物とを見出すまでその人数は地球を覆い尽くしていくに違いない。仮に「増加の法則」がなかったら、アレクサンダー大王（Alexander the Great, 356-323 B.C.）や〔鞭撻の征服者の〕ティムール王（Tamerlain, 1336-1405）のような2、3人の人生によってこの全世界が人で埋め尽くされはしなかったであろう。しかしこの法則が存在していて、人で溢れ返る洪水が新たな地方を開拓し続け、どんな征服者や、またどの悪疫がもたらした空白（gaps）も忽ちに溢れ返り満たされるのである（〔5〕 248-251頁）。

マルサスの創世記（cosmology）はこうである。「この世の印象と刺激とは至高の存在が事物を精神に作り上げる道具である」。害悪を回避し善を追求しようとする不変の努力の必要性がこれらの印象からの主発条である、したがってそれは人口原理が引き起こす困難を含めて、自然的及び道徳的害悪の存在に対する十分な理由なのである。これらのすべては現前にある困難にかかっているけれども、救治できなくはない。もし人間の努力が首尾よくそれらを減少してしまうと、それらはその目的を達成しえないのである。マルサスは絶対的な除去を約束してはいない。けれども完全や幸福のための来世での一生（future life）や黄泉での世の中（another world）を教示してくれているのである³⁰（〔5〕 268-9頁、また173-5頁）。

この偉大な経済学者といえども害悪の問題に着手した際には、おそらくは「彼の手に負えない」ものとなったのである。『人口論』に続いた論争においては、この当該部への言及は殆どない。この部分をすっかり削除した2版『人口論』の出現後

には、人々は初版の存在を忘れ去った。サムナーが自らの観点とマルサスのそれとの異同について語っている点からすれば、彼が初版に全く無知であったとするのはかなり疑わしいと言えよう。しかも博学な彼の2巻本はこれと同じ見解の拡充に過ぎないのである³¹（『天地創造の記録』第2巻103頁）。形而上学での深淺があらうけれども、形而上学的章句が用いられた際の意味を聞知するまで云々することはできないであろう。またいま耳にしても実行力を欠いてもいる。喜ばしくもそれらをドイツ語の意味で理想的である³²と信じえよう。とはいえ、マルサスの倫理の見解が彼の世紀のイギリスの道徳家とどんなに密接に関連しているかを忘失できない。また彼が形而上学的天才であったとの徴候も一切ない。彼によるより重厚なドイツ語文献の調査はその著書『神の秩序』から自由に統計を引き出す風変わり面白い楽天家のヨハン・ペーター・ジュースマルヒ³³（Johann Peter Süssmich, 1707-67）を超えてまで広がりはしなかったであろう。

マルサスは1度は自らの形而上学的見解を膨らます積りであった（〔5〕255頁注1）。別言するなら、彼はプライス（Richard Price, 1723-91）の論文集の仕方で経済学と文学とで折衷した1冊を世に送る予定であった。この企ての芽を摘み取り、『人口論』の公刊を遅らせた「不慮事」が何であろうとそれに深いため息をつく必要はない³⁴。形而上学的及び神学的文言はそのままでも1挿話の観を呈しているのである。しかもそれらに関する思索は論理的にはこの著の基調と連関してもいる。黄泉の世界、悪人への処罰、及び奇跡の行使に関する著者の見解は専ら個人的関心事ではある。アダム・スミスは『道徳感情論』の後続諸版においてその初版〔1759年〕で表していた1つの極めて明白な神学的所見の表現を省いてしまった³⁵（第Ⅱ部第2編204-6頁）〔アダム・スミス著水田洋訳『道徳感情論』（筑摩書房、1973年）142-4頁〕。そして多分彼の弟子たちは上手に倣ったのである。同時に、省略は改宗（recantation）ではない。一旦彼が信仰を告白した何らかの見解を発見すれば、著者の精神や性格に関する見方を入手できる。マカロクは経済学的研究の極めて初期段階で絶対的真理に到達し、スミスの主著を〔1828年に全4巻で〕編集してアダム・スミスを愛顧した。またある歴史的序論においてその他の経済学者たちを彼らの結論を前面に押し出し、尊んだ。彼はこの親愛をマルサスにまで広げている³⁶。すなわち、マルサスの一連の推理は価値あるものではあるけれども、誤りを免れてはいない。彼は発明や進歩に対する刺激としての人口原理の有益な効果を「ほぼすっかりと見落として」いたのである³⁷と、こう調べ出している（〔マカロク版〕『国富論』への序文52頁）。これは意識的にある型にはめて『人口論』を読む人の誰しもが犯す途方もない過ちではあったけれども、マルサスの（Malthusian）形而上学と

比較した場合、容認できないように思われる。マルサスは人口原理の「真因」と称賛しているまさにその現象を無視していると難じられているのである。彼は貧困の主因の1つばかりか、その主たる結果をも説明したとっていた。仮にアダム・スミスが労働力を富の1因であると証明していたとするなら、マルサスは貧困の力が富の1因であることを証明したと考えていたのである。疑うまでもなく、マカロクの誤りはありきたりのものである。その結果（百科事典や人名辞典については言うまでもなく）この点でマルサスを公正に評価している経済学の教科書は1冊もないようである。とはいえ、マカロクは非凡な専門家であった。彼はいつも権威ある1書として語っていて、この偉大なイギリスの経済学者の評判と極めて密接に関わっている事についての非凡な専門家による孫引きの1知識では満足いかなかったのである。

この賢人は改めて語り、次のように語っている。マルサス氏は「彼が取り扱っている科学分野に関する完全な見解というようなものを与え損なっている」〔マカロク版『国富論』への序文52頁〕と。ここには別な不可解がある。正確には、マルサスは自己への批判家の堅固不動に対して一切云々していないのである。大半の草分けたちと同様に、それらの詳細についてよりも自らの主導原理について一層確信していて、自らの見解を変更するのを決して恥とはしていないのである（例えば、『価値尺度論』を参照）³⁸。しかし、たとえ『人口論』が30年にわたる批判によって漸次精巧化されていったとしても、その全域に及んでいるか、あるいはその事柄の核心部に到達していない限りは、確かに討論する利益はなからう。

事実上、1798年の匿名での小八折り版である初版『人口論』は後年の完全となった著作の草案に過ぎないけれども、その主たる欠点は不完全さではなく、強調点の過誤である。ある人が論争の小冊子を書いている時には、すべての真実を一様に前面に持ち出そうとはしない。つまり、放置されてきたものを前景に置いて、否定したり、また無視さえしたりするのではなく、単に強調しないという理由から、精通事を後景にしても差し障りないのである。しかしながら、放置された真実は取り上げるに足るものであるとはいえ、段違いに無価値のものであり、必ずしもその保持を認めないということがありうる。科学は18世紀の問題に対してではなく、自ら自身の問題に対する答えを模索しているけれども、一時的論争を誤って重要視することを一切許さない。科学は、まず冒頭部を、次に本論を、最後に結論を置く、一本論に結論を置いたり、あるいは最初に結論を置いたりしない。科学にあっては、マルサスの初版『人口論』を取り上げて、その著者に修正をするよう求める。仮に彼が取り上げる選択をなした一般的問題に満足行く答えを与えようとするなら、彼

はより少なく批判的であつより創造的であらねばならない。時代と課題との両方が態度の変化を求めている。つまり、時代については、いまは政治理論が社会的困難ほどには重要でなくなっているからであり、また課題に関しては、彼によってこれまでに成就されたのがその困難に打ち勝つための真の手段（means）を暗示するにとどまっているからである。本当に、批判者であれ、偶像破壊主義者であれ、どちらも彼自身の真理が反対者の欺瞞を上回らない限り、決して反対者に間違いを悟らせることはできない。また、彼が彼の追隨者たちの熱狂次第であるのもこのゆえである。しかし、彼が常に誤りと同じほど十分に真理を説明しているとは限らない。それに、彼の共鳴者たちは知識よりも事実によって一層彼に追隨するのである。それゆえ、マルサスは次のことをなおさねばならなかったのである。—すなわち、彼自身が何をもって近代社会を高める手段であると信じたかや、何が貧民を救済する悪い方法で、また何が正しい方法であったのかを記述することである。

『人口論』の成功はこの点まではとても目覚ましかつた。それは多数からの反論を呼び起こした。また「進歩的な友人たち」を沢山改宗させた（『パー（Samuel Parr, 1747-1825）博士の説教を熟慮して得た考え—パー博士、マッキントッシュ（James MacKintosh, 1765-1832）氏、人口論の著者その他の攻撃に対する一答弁』1801年、54頁、また、ゴドウィン著『人口について』第I編27頁を参照）。ゴドウィンが1798年8月にこの著者に手紙を書いているのが見出せるし（ケーガン・チャールス・ポール〔Kegan Charles Paul, 1828-1902〕著『ゴドウィン：彼の友人たちと同時代人たち』第I巻322頁）³⁹、たとえマルサスが『食料高価論』（1801年）を匿名で執筆したとしても、匿名という覆面があまり分厚いものではなかったと正当に結論できよう。1800年2月11日の下院での討論の場で、機を逃さずこう論じたのである。すなわち、ピットの眩きによるなら、自分はいまだ新救貧案は良案と確信しているけれども、「その意見に敬意を払わねばならない方々」からの反対を尊重し、いまそれを取り下げたと（議事録、1429頁）。彼はベンサムやマルサスのことを指して言ったのである。そのどちらの功績により負っていたかを口にするにはできない。但し、マルサスがピットやペイリーを自分の最も輝かしい改宗者と考えていた⁴⁰ことはわかっている（エンプソン〔William Empson, 1791-1852〕「マルサス氏の生涯、著作、及び性格」『エディンバラ・レビュー』1837年〔第64巻第130号〕1837年、483頁）〔拙訳「マルサス氏の生涯、著作、および性格」『長崎県立大学経済学部論集』44巻3号（長崎県立大学学術研究会、2010年）108頁〕。ピットが依然として自らの法案が正当であると確信していると宣言していたことは、彼がいまなおそれをそうであると信じたいと願っていたことを物語っているだけに他ならない。経済学者の

好みに影響を及ぼした政治家にとっては、マルサスの厳粛な批判ばかりではなく、この法案を条項の個々からもみ殻を脱穀したベンサム滑稽な『生活保護法案の考察』⁴¹（『ウェストミンスター・レビュー』の編者であったバウリング（John Bowring, 1792-1872）編）『著作集』第8巻〔1838年〕440頁）がまんまと愛好する科学を自分自身とは相反する方向へと転換させたのを知った暁には、ことさら苦々しかったに違いない。

しかしマルサスがピット、ペイリー、それにパーといった改宗者を作っている間に、またゴドウィンでさえもが『『人口論』の著者』が経済学に価値ある付録の追加を認めた時に（『パー博士の説教を熟慮して得た考え』56頁）、『人口論』は非難を免れなかった。マルサスが舌足らずであったことを示す幾つかの良く知られた事実があった。彼の批判者たちはあらゆる側面から彼にそれらを印象付けた。哲学の章句を借用すれば、彼は十分には具体的でなかった。マルサスはゴドウィンの誤りに関わり過ぎて、人性のある特性を他の物と一緒にして判断すべきであったのに、それを一切と切り離して考察してしまった。現時代での文明社会の情勢と見通しは政治的、知的、物理的、及び道徳的原因の結合次第であり、人口の増減はその1結果に過ぎないであろう。仮にわれわれの一部分が人間、ライオン、豚であるとするなら、豚の支配の方が人間の支配よりも多いと仮定するのは無理がある。人間社会とは異なって、動物の群にあっては、各単位は「生存闘争で生存」した「最適者」であるに過ぎない。それゆえ、人口原理はそこでは最前線にあることになる。飢餓、疾病、死亡以外にそれに対する妨げはない。マルサスは人間を超えてまで追求しなかったけれども、そのゆえに、ダーウィン（Charles Darwin, 1809-82）は『人口論』を研究して、マルサスが気づき、命名した1つの一般概念でもってどのように「種の起源」を説明しているのかを理解することができる⁴²（〔5〕27、48-9頁、及び『種の起源』iii章、50頁、またヘッケル（Ernst Hæckel, 1834-1919）著『人間の進化』英訳書第1巻97頁）。動物間における余地と食物を求めての「一般的闘争」は文明人の間では自由貿易を、アダム・スミスによる経済的害悪への万能薬を意味する。つまり『人口論』の著者は立法的干渉に関してアダム・スミスと一致していることがわらう。取り除けない貧困の原因による結果が悪かろうとも、干渉はそれらをさらに悪化させる。とはいえ、少なくとも人間となれば、その闘争はさほど冷酷なものではない。「疫病が最後のものとなる」のが唯一でもなく、また至高の規則でもない。すべての動機の中で最も現世的で最も知的でない餓死の恐れがわれわれを強いて働かせるのに最初に必要とされても、それが必ずしもその後もずっと必要とされるわけではない。こうした考えはわれわれの階層（pile）の最低層にある

に過ぎない。われわれはそれらによって生じるが、それらを踏みつけもした。その階層が高まれば高まるほど、その重要さは低くなる。文明国の国中では、文明化に比例して、「闘争」は廃止される。不適合にも関わらず、最弱者が何度も救われ、また最下層が引き上げられる（A.R. ウォーレス（Alfred Russel Wallace, 1823-1913）著『自然淘汰説への寄与』〔1870年〕、及び1868年にこの問題に関して起こった議論を参照⁴³）。言い換えれば、人間を1動物としてではなく、文明化された存在としてみなせよ。人口原理を罪悪、窮乏、及びそれらへの恐れによってのみ妨げられるのではなく、人間社会のあらゆる入り混じった動機によって判断せよ。そうすれば、最良の志をもちながらもマルサスがその事柄を幾分か過度に抽象的に扱っていることがわかっていく。ゴドウィンが理性の力を過剰評価し、またマルサスは情欲の力を過剰評価したのである。彼はずっと後に「多分、私は弓が一方の側に余りにも曲がっているのに気付いたので、それを真っ直ぐにしようと反対に曲げようとし過ぎた」（1817年版への付録、〔8〕IV290-1頁）と記した⁴⁴。抽象的な増加の原理が事を正当性以上にしていまい、また人間生活の具体的な複雑さがより小さなものにしていくので、次の段階は当然のごとくこの世の恒久的改善の可能性を否定し、そしてシシファス⁴⁵（Sisyphus）の労働のようにいずれも部分的改善があると考えたことであつたのである⁴⁶（〔5〕252頁）。

食物の欲求と結婚の欲求とを2つの対等な仮定に置くことから始めれば、ほぼそうならざるをえない（〔5〕23-4頁）。実際にはそれらは対等ではない。前者は大半の人間にとっての真実であるにとどまらず、1人の例外もなく全員にとっての真実でもある。たとえ人間は40日間食べごたえのある食物を断って生きながらえとしても、水を断つわけにはいかない。またあらゆる有用な目的にとってその断食期間はこの世へ何もなさない。2つ目の仮定は大半の人間にとってのみの真実であり、しかもその場合さえ条件付きである。成人になるまで決して真実でないし、また全員にとっても一様に事実ではない。ある人は出生時の偶発事からままならない。また牧師または平信徒のいずれかを問わず、さらに多数が道徳的理由からその手に余っている⁴⁷。

マルサスは自分が性急であつたとわかつていた。それゆえ、それを改訂するまでに5年を猶予し『人口論』を再版しなかつたし、外国旅行や広範な読書の成果をそれに盛り込んだ。1799年に彼は何人かのカレッジ仲間と共に海外に出かけ、ドイツ、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、並びにロシアの一部を訪ねた。これらの国々は当時のイギリスの旅行者に開放する唯一の国であつた。帰国後、彼は『食料高価』に関する小冊子を公刊した。その中で、その価格の過度（excessiveness）

をその価格に正比例しての戸外救済額を増大している実態に帰したのである。この小冊子の結論部で、『人口論』の新版を約束している。すなわち、「その原理を直接にかつ排他的に社会の既存状態に適用することにより、また他国の状態について有する最良とされる説明からその作用の力と普遍性とを例証しようと努めることで、それが公衆の関心をより価値あるものにしうるという希望の下にその別な版を付するのを延期してきたのである。」〔マルサス著堀経夫・入江奨訳『食料高価論』創元社、1949年）42-3頁〕と。しかし彼は他国の人々の説明では満たされなかった。アミアン和平によって数多の物見遊山者たちが大陸へと解き放たれた時、マルサスは単なる観覧旅行目的ではなくフランスとスイスに足を運んだ。彼はナポレオンがイギリス人旅行者たちに不愉快な妨害をなすまでに、その校正刷りを印刷元に届け、運よく再び自国の地を踏めたのである。

1802年及び1803年にはマルサスが平和である一閃の短い光陰にあまりぞっとはしない人口に関する抑制について、つまりアミアンの休戦のように、将来へのおぼろげな期待をおそらく提供するであろう1抑制について書き得た一方で、1798年という暗黒の戦闘の時代においては罪悪と窮乏についてのみ書いたというのは幸運なる暗合であった。この世のためにこの平行状態がさらに弾みを付けないことを期待しよう。

新版（1803年6月）の序文の中で、彼はこう述べている、自分は「罪悪と窮乏のどちらの項目にも入らない人口に対するいま1つの妨げの作用を考えるほどに」、旧版とは「原理の上で大きく異な」っていて、「初版『人口論』の過酷極まる結論の幾つかを和げるよう努力し」てきた（〔6〕158頁）。実際にこれ以上の変化があった。初版『人口論』は急な雑誌論文のもつ不完全さを多々含んでいた。それゆえ、もしも著者が半世紀後に生きていたならば、その意見を変更する当該手段を採用したのは疑いえないであろう。彼はゴドウィンの政治的著作を評論し、併せてピット氏の救貧法案に関して付随した所見を付したであろう。このことから自ずと彼自身が初版『人口論』をどのようにみていたかが歴然となる。そうでないなら、再版に際してそれをそれほど自由には扱えなかったであろう。新版は追加事実、新配列、そして新たな強調点を有している。彼は自分の死後に世界がそれと向き合うようにして、決して万人向けの著を書かなかつたのである。彼は大衆と自分とを歩を一にし、あらゆる討論でもって自分の書を改善したり、拡大したりする手段としていた。この点が経済学書において『人口論』に独自色を与えている。しかしながら、それはいいことづくめではない。2版が刷新されたことでカント（Immanuel Kant, 1724-1804）は彼の注釈者全員を当惑させはしなかつたか。文言の変更がどのくらいな

のか断言できるのか、あるいは思想の訂正であるのか否か断言できるのか。もしこの面でマルサスに非の打ちどころがなければ、彼の負う罪は精々全面的な書直しの代わりに削除し挿入したことで読者たちを悩ませているということである。新しい靴下を作らないで、専ら絹がなくなるまで古い靴下を繕っているのである。

1つの変化がまさしくこの本の表題に表れた。1798年には、それは『それが将来の社会改善に影響を及ぼす限りでの、人口原理に関する1論』であり、1803年に至り、『人口原理に関する1論、あるいは人類の幸福へのその過去及び現在の影響に関する1見解』となった。将来の夢がいまでは背後に回り、現前の事実が正面にある。1798年にマルサスはゴドウィンの虚言を難じていた。

「彼は脚色し、大袈裟に言い、誇張し、絵空事を誇示し、
彼は事実に対して一段と和らげ、削り取り、軽減し、
彼は過去の夢物語に対しては上に舞い上がり、途方もなく、かつ非現実的で、
彼は取るに足らない過去のもの（it-was）に対しては限定し、減じ、縮小している。」⁴⁸

彼はいまやより多くをなさねばならない。そうでなければ、彼の経済学は陰鬱な科学となる。彼はわれわれがその理想を失わないでどのように「事態（matter of fact）」に執着できるのかを示さねばならない。われわれを来世に充当するだけでは足りない。現世においてどれほど期待できるかである。マルサスに答えてもらおう。

2版が彼の回答である。つまりもしもこの世がエウリピデス⁴⁹（Euripides 485-406, B.C.）と共に第2の思想を最良と確信してやまないならば、その場合には2版が初版から疑念を取り除くので、心配なく2版を喜ぶことができよう。総じて、文明化の力が人口の力を上回っていると語ってくれる。それゆえ近代における食物への人口（people）の圧力は古代あるいは中世のそれよりも少ない。今日では無秩序はより少なく、知識及び自制はより多い（2版IV編 xii 章、〔6〕IV181-2頁）。単なる肉体的妨げは従属的な位置へと転落しつつある。人口に対する「妨げ」は何であるのか。それらには2種類がある。1つの妨げは(a.)積極的なもので、現存人口を削減する、もう1つは(b.)予防的なもので、新しい人口を生じさせない。動物での妨げは窮乏のみであり、野蛮人では窮乏と共に罪悪であり、文明社会に至っては、道徳的抑制が罪悪や窮乏と肩を並べる。別な言い方をすれば、動物では積極的なもの以外の妨げの兆しは一切ないけれども、人間では積極的なものよりも予防的なもの

の方が漸次比重を増すのである。人間の間では窮乏は積極的にも、また予防的にも作用する。戦争や疾病という形で何万人をも殺害し、現存人口を削減するであろう。結婚自体がやって来るのを恐れて多くの結婚が妨げられ、その結果新しい人口を生じさせないであろう。罪惡もまた両方の様式で作用するであろう。すなわち、殺兇の場合のように積極的にか、またコンドルセの企図のように予防的にかである。しかし文明社会にあっては秩序と進歩の双方の勢い (forces) は共通の敵である罪惡と窮乏に対置されている。それゆえこれら2つ以外の妨げを認めないならば、確かにゴドウィン⁵⁰の社会に用いられた議論が全社会に当てはまることになる。社会の純化こそがその人口を過度に増加させ、社会を崩壊させるであろう。けれどもマルサスが道徳的抑制の見出しで理解している第3の妨げがある。

道徳的抑制は予防的妨げの明瞭な形態である。それは罪惡の項目になる不純な独身と混同されるべきではない。その上なお「道徳的」という形容詞によってその動機が可能な最高のものであることを意味してはいない ([6] I 25頁注1、II 320-1頁)。どんな動機に起因してしようと、その形容詞は作用の動機にというより作用自体に適用されている。それゆえ、ある功利主義者の口を借りれば、この文言は非哲学的ではない。マルサスの書物における「道徳的抑制」は単に何等の不品行 (irregularities) をも伴わない結婚の禁欲を意味している ([6] I 24頁)。ロジャーズ (James Edwin Thorold Rogers, 1823-90) 教授はこの通称に異を唱える必要はないのである ([『学校・カレッジ用の経済学便覧』 [1868年] 69頁)。それどころかマルサスは穀物奨励金という「道徳的刺激」を口にしていて、それが穀価にもたらす変動と区別し、単にそれが人間の精神にもたらす期待を意味させている⁵⁰ (7版351頁) ([8] III 265頁)。つまり「道徳的」という用語は「士氣 (morale)」と同じように何度も軍事的事柄で使用されていて、物的資源と区別されるように、精神的気質ということを示している。この用語の曖昧さには利点がある。というのもそれが用いられ示している混合した動機の大部分以上に曖昧なものはないからである。

人間の精神は「多数に切り分け」られることができない。それゆえ、たとえ人間の行動を導く混合した動機をばらばらにすることができるとしても、それらが一緒になって始めて働くという事実には変わりはない。おそらくは善人の動機が常に絶対的に高貴であったわけでないし、悪人の動機がいつも絶対的に野卑であったわけでもない。人間の動機は鼻から混合していて、聖人においても、賢人においても、あるいは野蛮人においても変わらない。しかし、もし文明化が社会の支配的思想における急進的な変化を含んでいるなら、その混合体の性格やその要素の割合を変えるであろう。マルサスの名に触れられていなくとも、また肉体的または道徳的「妨げ」

が全然想起されなくても、この「マルサスの法則」に従って作用しよう。社会はすべて一緒に動くのであるから、いやしくもそれが動いているなら（またそれがまったく停止していないなら）、ある社会的害悪を矯正するモリソン（James Morison, 1770-1840）の丸薬（pill）⁵¹を金輪際必要としないであろう。以上のことは、心に新たな希望を与え、肉体的器官に新生命を吹き込むような前向きの（positive）真理や理想、正確に言うなら、宗教を必要とするのである（〔5〕265頁）。

経済学者たちは度々「自由放任」と同一視される。理想的な国家が無政府状態に警官を加味したものであるにも関わらず、フランスの革命主義者たちがただその旧統治者の死去によって招来されるであろう幸福や良き政府を確信していると非難されたように、経済学者たちは交易への現存の障壁を除去するだけで今日の生活財貨の生産と分配とをなしうる最善に至らせるであろうとしばしば教えているように思われる。しかし、彼らが望んだのは単なる消極的変化ではなかった。それは単なる危害の撤去ではない。否。政治改革は心象を絶する以上に進行する場合にのみ、新教徒のように、功を奏するであろう。旧法に従わない限り、われわれ自身は1つの法の下にあるに違いない。有害な法が撤廃された場合、人々を新たな情勢に調和させる気質や思想の前向きな変化がこの国のような国で達成される唯一の現実の事態であった。穀物法の撤廃は1つの「扇動（agitation）」、すなわち社会に富と貧困の原因をより一層気付かせる一連の公論によってのみの結果であった。全体として朗読されたコブデン⁵²（Richard Cobden, 1804-65）の演説が示すのは、単に消極的なものというよりも、むしろ自らが主張したどのようにしてこの運動が穀物法の撤廃と共に積極的な方策を丸ごと実行したかであろう。いやしくもそれと同じようであるなら、救貧法の撤廃がその結果となろう。われわれが1国民（people）として賢明な慈善と無分別な慈善との区分に、また儉約した慈善と浪費的慈善との区分に気付き、自らを前者に限定しようとする時にのみ挙って施行できるであろう。

言葉を変えるなら、ニューマン⁵³（Francis William Newman, 1805-97）氏がどんなことを述べたいようとも（『コンテンポラリー・レビュー』1879年10月）、マンチェスター派⁵⁴（Manchester school）は道徳を疎かにしていなかったのである。世論を高められないなら、それは国家を小さくしたいのである。仮にゴドウィンが誤って過大な害悪を制度に帰し、少しも人性のせいにしていなかったとすれば、彼は自らの修正を成し終えていたであろう。知的教授と共に道徳的純化を含む徹底した啓蒙が国民に施されたなら、「全員を改める」という業が達成され、そこでは人間は神に味方する同志の働き手になるに違いない。競争の害悪の多少や強弱の加減は総じて競争者の性格次第である。それゆえ、より自由に競争をすればするほど、ます

ます徹底して競争者を教育しなければならない。アダム・スミスはこのことに気付いていた。彼は1870年や1872年の法よりも百年前に学校〔教育〕委員会⁵⁵ (School Boards) を推奨していた (『国富論』 第5篇第1章第3節第2項「青少年教育のための施設の経費について」) [水田前掲訳書下183-206頁]、また、マルサスは彼に遅れをとることはなかった (後期版『人口論』 IV編 ix章、〔6〕 IV106-8頁)。2人は、政府の干渉を完全に排除すればするほど、国民の嗜好や習慣を純化し高めるためにあらゆる他の道徳的・社会的媒体を用いるべきであることに気付いている⁵⁶のである。

マルサスの冷酷さに対する慣習的な信仰までの奇妙で誤った思い込みは決して存在しなかった。エンプソン⁵⁷、マーティーノ⁵⁸ (Harrite Martineau, 1802-76) 女史、マッキントッシュ⁵⁹、及び彼の友情やもてなしを享受した他の人たちの証言をまったく棚上げにしても、反対方向にある作家に事欠かないことは立証済みである。アダム・スミスや他の人たちの誤りは単なる知識上の不正確さ (fallibility) のためであるけれども、マルサスのその大半は実際自らの優しい心情からのものである。彼が経済学を研究している動機は間違いなく「混合的」であった。その一部は抽象的問題における英才の関心ではあったけれども、専らは最大多数の最大幸福を前進させようとの欲求であった。彼の慧眼では、人間生活の向上は科学的問題の解決よりも遥かに重要であった。彼が抽象的な『経済学原理』を著わした時でさえ、表題に「それらの実際的適用を目的として考察する」(1820年)と付記する配慮をなしたのである。言うなれば、彼は常に具体的に存在するものを抽象的に考察するのを拒否していたのである。彼は行き場を失った働き手の苦悩への心からの共鳴者であり、それゆえにセー (Jean-Baptiste Say, 1767-1832) やリカードウとの負け戦に臨んで、発明に対する禁止のようなものに味方し、架空の (fancied) 過剰生産に対して抗した⁶⁰のである。読者の方々が彼の助勢で彼を越えようとなさるなら、彼の精神を共有するであろう真の継承者となられるであろう。

訳注

1. この全般的な様相については、チョロナー著武居良明訳『産業革命期の人びと』(未来社、1967年)や荒井政治・内田星美・鳥羽欽一郎編『産業革命の技術』(有斐閣、1981年)等が手引きとなろう。また個々別々には、取り敢えずは、有吉玉青他『私の英国物語：ジョサイア・ウェッジウッドとその時代』(講談社、1996年)、フィリップ・S・バクウエル、ピーター・ライス著梶本元信訳『イギリスの交通』(大学教育出版、2004年)16-9頁、永井厚訳・著『自伝トーマス・テルフォードの生涯』(ニチマ、1985年)、S. スマイルス、A. ギブ、A.D. カメロン著永井厚訳篇『トーマス・テルフォードとカレドニア運河』(ニチマ、1991年)、及

び大野誠著『ワットとスティーヴンソン』（山川出版社、2017年）等を参照。ちなみに、バクストン付近で生まれ、スタフォード州の天才的水車大工として活躍していたブリンドリーが「リーク（Leek）でジョサイア・ウェッジウッドのために製陶工業の原料を粉碎する円筒型水車を」作ったと言及されてもいる〔アーミティジ著鎌谷親善・小林茂樹訳『技術の社会史』（みすず書房、1970年）59頁〕。

2. ボナーは「マルサスはこの用語を時に初期の意味で用い、またスミスは減多に後期の意味では用いていない」と説明している（〔2〕41頁註1）。確かに、『国富論』における manufacturer という語の大半は「製造工」を指示していて、「製造業者」を意味する場合には master manufacturer が原則として配されている〔高木正道著『ヨーロッパ初期近代の諸相』（梓出版社、1989年）236、239、242、254、260頁〕。『人口論』では、初版において「製造業者」が2度使われてはいるけれども（〔5〕75、231頁、また2版以降でも踏襲されてはいる、〔6〕Ⅲ130頁）、「交易や製造業にもちいられる労働」（〔5〕232頁）が2版で一層深化され（〔6〕Ⅲ143-4頁）、5版に至って「商人及び製造工たちの階級」と認識されているようである（〔8〕Ⅲ149、154頁）。ちなみに、『国富論』での workman は概して雇用主に対する「雇用労働者」の意に使用されている〔高木同書69-70、257頁〕。
3. 「福音主義者としては、ホイットフィールドを始めとする初期の野外説教者たちの方がウェスリーよりも強い印象を与えた。しかし…統率者、立法者だったのはウェスリーで…民主主義と規律、また教義と煽情主義を実に正しい配分で組み合わせ…商業や市場の中心地や、鉱夫や織布工や農業労働者のコミュニティでの自立したメソジスト団体を組織した」〔エドワード・P・トムスン著市橋秀夫・芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』（青弓社、2003年）47頁〕と概説され、ウェスリーは「貴族やジェントリの奢侈や怠惰な生活を非難し、腐敗選挙区の是正は必要と考えており、また貧民や働く人びとに同情をよせ」、奴隷解放運動さえ支持していたとされている〔浜林正夫著『イギリス宗教史』（大月書店、1987年）195-6頁〕。但し、ホイットフィールドは当初こそアルミニウス派のウェスリーに友好的であったが、渡米時（1738年）の回心体験を転機にカルヴァン主義的な予定論（信仰のみによる救済）に改宗し、ウェスリーが支持していた国教会の「39箇条」（普遍救済説）を否定するに至り、対立・分離していった〔浜林同上書197-8頁、山中弘著『イギリス・メソディズム研究』（ヨルダン社、1990年）81-2頁、及び山本通著『禁欲と改善』（晃洋書房、2017年）151頁〕。
4. フランスの歴史家アレヴィ（Elie Halévy, 1870-1937）は『1815年のイギリス』（1913年）の第3部第1章「宗教」の中で、イギリスが革命を免れたのは福音主義運動に基づいた国民への宗教感情の浸透によると提起した。このアレヴィ・テーゼはそれ以降多くの諸論議を惹起させてきている〔松塚俊三「アレヴィー・テーゼとウィアマス」ロバート・F・ウィアマス著岸田紀・松塚俊三・中村洋子訳『宗教と労働者階級』（新教出版社、1994年）所収、並びに山本前掲書第10章を参照〕。ボナーによる福音主義運動に基づいた保守性の指摘は、後年のハモンド夫妻（John Lawrence Le Breton Hammond, 1872-1949&Lucy Barbara Bradby, 1873-1961）の見解に近いように思われる〔松塚同論文347頁〕。
5. いわゆる穀物法の当時の変遷については、さしあたり、金子俊夫著『イギリス近代商業史』（白桃書房、1996年）5-22、210-17頁を参照。
6. スミスの ill desert 論には、「荒涼たる砂漠」では「孤独の恐怖」に打ち勝てないことも含意されていた〔田中正司著『アダム・スミスの自然神学』（御茶の水書房、1993年）169-70頁、183頁註20〕。

7. 例えば、スミスは、リーグニッツの戦い（1760年8月）で戦禍を被った貧国ポーランドの「穀物の貨幣価格は上昇し、貴金属の実質価格は低下した。したがって…貴金属の量はその土地と労働の年々の生産物と殆ど同じ比率で増大したに違いないのである。」と言及し〔水田洋訳『スミス 国富論』（河出書房、1965年）上212頁〕、「1国における銀量増大がその価値低下に直結しないことを」立証しようとした〔飯塚正朝著『「国富論」と十八世紀スコットランド経済社会』（九州大学出版会、1990年）79頁、また渡辺邦博『「国富論」第十一章第三節『銀の価値の変動に関する余論』について』『経済学雑誌』83巻6号（大阪市立大学経済学会、1983年）を参照〕。
8. 1722年のナッチブル法のことで、その正式名称は「貧民の定住、雇用、及び救済に関する法律を改正するための法」である〔榎原朗著『イギリス社会保障の史的研究Ⅰ』（法律文化社、1973年）71-9頁や小山路男著『西洋社会事業史』（光生館、1978年）56-9頁等を参照〕。
9. ギルバート（Thomas Gilbert, 1720-98）法、すなわち、「貧民のより良き救済と雇用のための法」は、有能貧民を教区の労役場から排除し、失業者あるいは低賃金労働者に対する手当制度（allowance system）を合法化した〔榎原同上書81-3頁や小山同上書93-4頁等を参照〕。
10. この点に関しては、枚挙にいとまない。取り敢えずは、D.モルネ著坂田太郎・山田九朗監訳『フランス革命の知的起源』（勁草書房、1969年）上117-24、131-6、139-40頁等を参照。
11. ユートピア思想を通観する際には、グレゴリー・クレイズ著翼孝之監訳『ユートピアの歴史』（東洋書林、2013年）が至便。
12. 2版『人口論』以降の諸版に何度も援用されている（〔6〕I 58、72、81頁、207頁注1、216頁、IV 69）イエズス会のレナル神父の代表作である19編からなる全4巻の匿名書『両インドにおけるヨーロッパ人の植民事業と通商に関する哲学的・政治的歴史』（1770年）〔ギョーム＝トマ レナル著大津真訳『両インド史 東インド篇上・下、西インド篇上』（法政大学出版局、2009-15年）、マルサスが引いているのは東インド篇上、54、64、301-2頁、また311-6頁も参照、なおその他の引用部は未刊の西インド篇下（15～19編）に収載されるものと判断される〕は大好評を博し、73年には少なくとも6度目の再版がなされ、ディドロ（Denis Diderot, 1713-84）からの影響や支援を強めつつ、81年3月には3版を重ねた〔中川久定著『ディドロ』（講談社、1985年）29、199-202頁〕。ちなみに、マルサスが利用しているのは1795年にパリから刊行された全10巻本である（〔6〕207頁注1、216頁注1）。また、アミアンで自然学を教えていたレナルはディドロの『数学論文集』（1748年）を『文学新報』（1750年）で絶賛し、ディドロの方も1781年3月に『グリム（Frédéric Melchior de Grimm, 1723-1807）氏に宛てたレナル神父の弁護の手紙』を執筆している〔中川同書111、361頁〕。
13. 「最初トーリーに所属していたフォックスは…アメリカ問題を契機にロッキングガム（Charles Watson Wentworth Rockingham, 1730-82）・ウィッグに身を転じ、それ以降バークと相協同してウィッグを支え」ていたが、両者はフランス革命勃発を機に対立を深めていった〔中澤信彦著『イギリス保守主義の政治経済学』（ミネルヴァ書房、2009年）121-131頁、並びに中澤信彦・桑島秀樹編『バーク読本』43-4、63頁〕。
14. 大前朗郎著『英国労働政策史序説』（有斐閣、1961年）50-3頁、及び榎原前掲書92-6頁を参照。
15. ベンサム（Jeremy Bentham, 1748-1832）がピット案批判の最たるものであるが、96年12月22日に提出されたピット法案は各地の四季裁判所（quarter session）からの猛反対を受け、

- 翌年2月28日に否決された〔大前前掲書151-6頁、小山前掲書98-9、103頁、榎原前掲書96頁、及び吉尾清著『社会保障の原点を求めて』（関西学院大学出版会、2008年）151-2頁注9、168-9頁等を参照〕。
16. こうした議論の末に、1795年5月6日に7人の聖職者を含む18人の治安判事がバーク州のニューバリに近いスピーナムランド（Speenhamland）にあるペリカン・インでの四季裁判に参集し、下院議員でもあったダングス（Charles Dundas, 1751-1832）をその議長としてパン価格と労働者の家族数とに比例して賃金を補助する賃金補助（allowances in aid of wage）制度を決議し、翌年にはこのバーク州の等級（scale）に基づいたスピーナムランド制が議会制定法であるウィリアム・ヤング法により全国的に施行されていった〔大前前掲書58-90頁、小山前掲書103-9頁、榎原前掲書98-125頁、大沢真理著『イギリス社会政策史』（東京大学出版会、1986年）52頁、及び吉尾前掲書61-3頁、79頁注1及び注3、120-5頁を参照〕。
 17. 残存している断片章句〔橋本比登志著『マルサス研究序説』（嵯峨野書院、1987年）367-9頁〕には青年時代のマルサスの政治的心情が吐露されていて、この当時マルサスがフォックス派ウィッグであったことが析出されている〔中澤前掲書第6章〕。ポナーもマルサス政治論は「バークよりもむしろフォックスに追随し」た「進歩的ウィッグ（an advanced Whig）」の見解であり（〔2〕463、466頁も参照）、かつ「フォックス、グレイ（Charles Grey, 1764-1845）一派の進歩的ウィッグの議論にほかならない」と論じている（〔3〕335頁）。
 18. マルサスは2版『人口論』以降の諸版で、「徴兵官はつねに凶作と雇用の不足を、別言すれば過剰人口を念じている」と記述している（〔6〕IV27頁、また拙論「マルサスにおける必需品（小麦パン）と便宜品（靴下）」『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』54巻1号（長崎県立大学佐世世校学術研究会、2020年）20-1頁も参照〕。
 19. フォックス派の若手議員であったウィットブレッドが1807年2月19日に提出した「一般社会の労働階級の間で勤労を促進、奨励し、犯罪貧民や困窮貧民を救済、規制するための法案」〔柳田芳伸・田中育久男訳「ウィットブレッドの救貧法に関する演説」『長崎県立大学経済学部論集』49巻3号（長崎県立大学経済学部学術研究会、2015年）49-136頁〕の内容については、大前前掲書186-96頁、及び田中育久男「救貧法改革におけるウィットブレッドとマルサスの交流」柳田芳伸・山崎好裕編『マルサス書簡のなかの知的交流』（昭和堂、2016年）所収、68-72頁に詳しい〕。
 20. フォックスは経済学を「あらゆる科学の中で最も無意味なもの」と侮蔑していて、当時のフォックス派の大多数が経済学的認識を欠いていた〔中澤前掲書135-7頁〕。
 21. 例えば、ピットは1787年4月にダングス（Henry Dundas, 1742-1811）卿のウィンブルドンの別荘での夕食会に招待され、延着したスミスとそこで初対面したけれども、深い敬意をもって出迎えた。また、スミスの方もピット邸でシドマス（Henry Addington Sidmouth, 1757-1844）卿に「ピットこそ実に非凡な人物である」と語ったとされている〔北野大吉著『英国自由貿易運動史』（日本評論社、1943年）35-6頁、及びI.S. ロス著篠原久・只腰親和・松原慶子訳『アダム・スミス伝』（シュプリングー・フェアラー東京、2000年）338、405、428-9頁等を参照〕。
 22. タウンゼンドの経歴については、拙稿『マルサス人口論の源泉 別刷日本語解説』（ユークリカ・プレス、2006年）20-3頁や、マルサス学会編『マルサス人口論事典』（昭和堂、2016年）291-2頁を参照。なお、タウンゼンドの『スペイン旅行記』がいまなお有益な史料であること〔拙訳「19世紀スペインにおけるマルサス『人口論』の受容」『経済論集』67巻3号（関西大学経済学会、2017年）213頁訳注21〕や、シュルバーン卿（Earl of Shelburne, 1737-

- 1805) やベンサムの人でもあったタウンゼンドが1761年にアイルランドのケリー郡にいた時に、地質学の研究にもすっかり魅了され、ファーリー・ハンガーフォードの教区司祭であったリチャードソン (Benjamin Richardson, 1758-1832) や不可知論の地質学者スミス (William Smith, 1769-1839) との親交を深めていった点も疎かにできないであろう [サイモン・ウィンチェスター著野中邦子訳『世界を変えた地図』(早川書房、2004年) 154-62、173-4、245-6、328頁、及びエリー・アレヴィ著永井義雄訳『哲学的急進主義の成立 I～III』(法政大学出版局、2016年) II 108頁]。
23. ボナーはステュアートの『経済の原理』(1767年) もマルサスを触発したと付記している ([2] 49頁注5、また『マルサス人口論事典』136頁も参照)。そしてその後、ボナーはフランクリン (Benjamin Franklin, 1706-1790) の『人類の増大、諸国の人口などに関する考察』(1751年) にも触れてはいるけれども ([2] 92-3頁、また『マルサス人口論事典』257頁も参照)、フランクリンのマルサスへの投影はもっと大きかったように思われる [Patricia James, *Population Malthus* (London:Routledge & Kegan Paul, 1979), pp.106-7、拙訳「19世紀スペインにおけるマルサス『人口論』の受容」385頁注3]。
24. マカロク版『国富論』の割り付けでは、各頁は左列(1列目)と右列(2列目)とに区分され、そして当該文言が盛り込まれている文章はその p. 36の2列目に配置されていて、「Wealth of Nations” I.viii.36, 2」と表記されているものと推される ([2] 51頁注2)。ちなみに、ボナーはスミスを「経済学の父たる人たちの内最も偉大なる者」と称賛している ([2] 62頁注4)。
25. 柳沢哲哉「J.B. サムナーとマルサス」中矢俊博・柳田芳伸編著『マルサス派の経済学者たち』(日本経済評論社、2000年) 所収、83-104頁を参照。
26. ボナーはマルサスが青年期にタッカー (Abraham Tucker, 1705-74) による全4巻の1765年刊『『自然の光明』を学び、その教理の多くを採用し』て、こうした主張をなしたと解している ([2] 56頁注3、443-4頁、また大村照夫著『アブラハム・タッカー研究序説』[晃洋書房、2003年] 97-100頁も参照)。
27. これはテオクリトス (Theocritus, 310-250, B.C.) の『牧歌 (Iddlys)』の第21歌の最初の一節である。「ディオファンテス」というのはギリシアの一般的な人名で、テオクリトスの知り合いと推測されているが、詳細は不明 [テオクリトス著古澤ゆう子訳『牧歌』(京都大学学術出版会、2004年) 156頁]。
28. 但し、こうしたロックの理解は主として『人間知性論』(1690年) に見られる [岩田朝一著『ロック教育思想の研究』(理想社、1963年) 10、25、56、63-9頁、平井俊彦著『ロックにおける人間と社会』(ミネルヴァ書房、1964年) 24-9、61-4頁、生越利昭著『啓蒙と勤労』(昭和堂、2020年) 13、40-2頁、及び柘植尚則著『近代イギリス倫理思想史』(ナカニシヤ、2020年) 133-6頁等を参照)。ちなみに、ボナーによれば、ゴドウィンの『探究者 (*The Enquirer*)』(1797) 年もロックの心理学に基礎を置いているとされる ([1] 上105頁、[2] 20頁、また W. ゴドウィン著片岡徳雄・住岡英毅・山根祥雄訳『探究者』[黎明書房、1977年] 131頁も参照)。
29. イタカ王ラエルテス (Laertes) の子で、ホメロス (Homer) 作のギリシア最古にして、最大の叙事詩『オデュッセイア (Odyssey)』の主人公。ホメロスの『イリアス』によって伝えられているミケーネ、スパルタらとトロイアとの間で交わされたとされる約10年のトロイア戦争 (Trojan War) において、ギリシア軍の1大将としてその勇氣と智謀を發揮したとされる [『西洋人名辞典』(岩波書店、1956年) 298頁]。ちなみに、ここでは、以下のような

挿話が前提とされている。すなわち、『オデュッセイア』によれば、トロイア戦争に勝利したオデュッセウスは故国イタケーを目指して航海を開始したが、オデュッセウスの船団はキュテラ島付近で北からの風波によって航路を外れてしまい、ロートパゴス族の土地（リュビアーの西部）に漂着した。そこでロートパゴス族と遭遇したオデュッセウスの部下たちは彼らからナツメに似たロートの果実をもらって口にした。それが余りにも美味で、それを食べた部下はオデュッセウスの命令や望郷の念を忘れてしまい、この土地に住みたいと思うようになってしまった。オデュッセウスはやむなく部下たちを船まで引きずって行き、他の部下がロートを食べないうちに出航したという挿話である（〔2〕56頁註5）。

30. ボナーはこの際に、「肉体と情欲徒に包まれたこの世の人間の魂は…ただ想像でだけ達することができもの以外は、神と連絡がない。未知の目に見えない通過できない純粋な領域に移されると、その時この神は魂の導き手となり王となる。」〔ヘンリー・ジョージ著山崎義三郎訳『進歩と貧困』（日本経済評論社、1991年）416-7頁〕というジョージ（Henry George, 1839-97）の結尾の言葉と対比するよう求めている（〔2〕58頁註2）。
31. 柳沢前掲論文92、100-1頁。また、サムナーとマルサスとの異同に関しても、同論文98-100頁を参照。
32. ロッシャー（Wilhelm Georg Friedrich Roscher, 1817-95）はベルリン大学時に史学教授ランケ（Leopold von Ranke, 1795-1886）から徹底したゼミ教育を受けていて、そのランケはフィヒテ（Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814）を介してカント（Immanuel Kant, 1724-1804）からのドイツ理想主義の影響をも受けていた〔杉本栄一訳『ロッシャー 英国経済学史論』（同文館、1929年）訳者小引7頁〕。
33. マルサスは初版『人口論』の中でプライスの全2巻『遺族給付の考察』の4版（1783年）を介してジュースミルヒの『神の秩序』から統計数値を引いてはいる（〔5〕94-8頁）。マルサスが実際に『神の秩序』を探求するのは初版『人口論』の刊行後のことである（〔2〕571頁）。そして2版『人口論』では、バウマンによる4版『神の秩序』（1775-6年）の6刷版（1798年）の全3巻を一再ならず用いている（〔6〕II22頁注5）。しかしそれらの個所からは、「ジュースミルヒからの内容的影響は認めることができない」であろうとされている〔『マルサス人口論事典』140頁、また岡田實著『現代人口論』（中央大学出版部、1996年）8章をも参照〕。
34. 『道徳感情論』で「スミスが自らの自然神学観を明示的に展開したのは、初版ではなく、第2版と第6版においてであった。…しかし、これらの事実、スミスが初版では自然神学思想を前提していなかったことを何ら意味するものではない。スミスが初版では自らの神学観を必ずしも体系的に論述しなかったのは、…事改めて自らの神学的前提についてコメントする必要を初版では認めなかったためであった」と解釈されている〔田中正司著『アダム・スミスの自然神学』（御茶の水書房、1993年）175頁〕。スミスは初版の2部2編2-3章で神の名において「正義の一般規則」を打ち立てようとした〔同書167、169-70、176頁、また久保芳和著『スミス・マルサス研究論集』（大阪経済法科大学出版会部、1996年）40-4頁や遠藤和朗著『マルサスとスミス』（多賀出版、2012年）第1章も参照〕。但し、『道徳感情論』のマルサスへの影響の有無となると、賛否両論があり〔拙論「わが国におけるマルサス研究の動向」『マルサス学会年報』創刊号（マルサス学会、1991年）62-3頁〕、ボナーは肯定している（〔2〕443頁、444頁註1、また〔6〕IV28頁も参照）。しかし管見の限りでは、マルサスがはっきりと『道徳感情論』に触れているのは、1833年6月23日付けでチャーマーズ（Thomas Chalmers, 1780-1847）に宛てた文面においてのみであろう〔『マルサス書簡のな

- かの知的交流』291頁)。
35. この点、マルサスが『価値尺度論』(1823年)で、より充実した執筆計画が「予期しない事情で妨げられ…現在の形のまま公刊することに決めた」と述べていることとの類似にも注意すべきであろう(マルサス著玉野井芳郎訳『価値尺度論』〔岩波書店、1949年〕58頁、〔2〕62頁註2)。
 36. マカロクのマルサス評は微妙で、5版『人口論』の所感について、1818年12月27日のリカード宛て手紙の中で、「それ以前のものよりはっきり劣っています。」と吐露するだけにやまず、19年12月5日付けでは、「経済学者としてのマルサスの名声は大變過大評価されていると思う。…彼がジェフリー(Francis Jeffrey, 1773-1850)の特に親しい友人でなかったならば、…私は彼を然るべき程度にまで引きずり降ろそうと試みたはずです。」とまで酷評している〔中野正監訳『デイヴィッド・リカード全集第Ⅶ巻』(雄松堂書店、1971年)447頁、中野正監訳『デイヴィッド・リカード全集第Ⅷ巻』(雄松堂書店、1974年)157頁、また同訳書Ⅷ188頁も参照)。それに対し、マルサスの方は1820年以降マカロクとの交信を開始し、概して「マカロク氏を高く評価し」、1826年7月17日にはエディンバラで会ってもいる〔拙訳「マルサスのスコットランド旅行記等」『長崎県立大学論集(経営学部・地域創造学部)』53巻2・3号(長崎県立大学佐世保校学術研究会、2019年)79頁、81頁註9、104頁)。
 37. 例えば、H. ジョージは「マルサスの学説は進化の考えを本来的には含まなかったし、また必然的に含むものでもない」と論及している(ジョージ前掲訳書75-6頁、また〔2〕註5を参照)。
 38. ボナーはその例として、マルサスが「私は前著では…と考えたが、現在では私が間違っていた…と信じている。」(玉野井前掲訳書28-9頁注)と述べたり、あるいは2版『経済学原理』(1836年)の中で「労働に対する需要は…私がかつて考えたように、年々の全生産物の交換価値の増大にさえ比例しない。」〔依光良馨訳『マルサス経済学原理』(春秋社、1949・1954年)下25頁〕と記述したりしていることを挙げている(〔2〕62頁註8)。
 39. ゴドウィンとマルサスとの人口論争に関しては、白井厚著『増補版ウィリアム・ゴドウィン研究』(未来社、1972年)156-73頁を参照。また、マルサスが1798年8月20日付でゴドウィンに宛てた私信やその分析については、中野力「マルサス=ゴドウィン人口論争の一展開」『マルサス書簡のなかの知的交流』所収、1-25頁、並びに同書204-7頁を参照。
 40. ボナーは『人口論』の注〔〔6〕IV174頁注1〕への参照を促してもいる(〔2〕65頁註5)。
 41. ベンサムが1797年1月と2月に執筆したとされる本著については、永井義雄著『ベンサム』(研究社、2003年)162-70頁を参照。また、木村正身「ベントム主義と社会政策」山田高生・津田眞激編『社会政策の思想と歴史』(千倉書房、1985年)所収、38-54頁も参考。
 42. ダーウィンが「たまたまの楽しみのために」ではなく「読むべくして通読」したのは初版『人口論』ではなく、6版『人口論』である。この「ダーウィン=マルサス問題」に関しては、柳田芳伸・姫野順一編『知的源泉としてのマルサス人口論』(昭和堂、2019年)10-8頁を参照。ここでは、マッカベ(Joseph Martin McCabe, 1867-1955)がヘッケルの第5版『人間の進化〔人間発生学・存在論〕』を拡充、編集、英訳して、1905年にワット社から刊行している点だけを補記しておきたい。
 43. さしあたり、『知的源泉としてのマルサス人口論』149-50頁を参照。
 44. スミスも「竿が一方に曲げられ過ぎたなら、それを真っ直ぐにするには、それだけ大きく他方へ曲げなければならない。」〔水田前掲訳書下127頁〕と述べ、重商主義者に対するフランス経済学者たちの反動を説いている(〔2〕70頁註4)。

45. 狡猾さと略奪とで名を馳せたギリシア神話の人物。冥界で永久に転がり落ちていく岩を繰り返して山へと持ち上げていく刑罰を受けた〔『西洋人名辞典』627頁〕。
46. シーニア（Nassau William Senior, 1790-1864）は1829年3月26日付のマルサス宛書簡の中で、これを「壁を4フィートよじ登っては3フィート滑り落ちるカタツムリの運動」にたとえている（〔2〕70頁註6、及び森下宏美著『マルサス人口論争と「改革の時代」』（日本経済評論社、2001年）101頁）。
47. 英国図書館に所蔵されているコールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）の遺言執行人であったグリーン（Joseph Henry Green, 1791-1863）文庫には、コールリッジによる2版『人口論』への書き込みが含まれている。そこには、「問題のすべてはこうである。すなわち、色欲や飢えは両方とも肉体的必然（Necessity）の情欲と同様であるのか、また同じ様にその一方は理性や意思とから独立した別物であるのか。この問いかけをあえて発する個人（the individual）が生きているのはわが人類への恥辱この上ない。」と書き入れてある（George Reuben Potter, "Unpublished Marginalia in Coleridge's Copy of Malthus's", *PMLA*, 51.4 (1936), p.1062、また〔2〕71頁註3も参照）。
48. ボナーによれば、これはヴィクトリア朝の詩人クラフ（Arthur Hugh Clough, 1819-61）が1848年の夏に書いた長い叙事的詩 *The bothie of Toper-na-fuosich*〔副題は「牧歌的な長い休日」〕からの抜粋である（〔2〕76頁註）。
49. ギリシア3大悲劇詩人の最後の人で、伝統、宗教、神話をそのままに認めず、常に批判的であり、神の祭典と結びついたギリシア古典悲劇とは一致しなかったとされている〔『西洋人名辞典』245頁〕。
50. 多くの食物があるのに、悪い分配がそれを入手できなくしている場合には、「増加していく道徳的不可能（moral impossibility）」が作用していて、この不可能は物理的法則ではなく、人類の制度（mores）に起因している（〔2〕79頁註3、また〔6〕I 185頁）。
51. モリソンはスコットランドの名家の出で、貿易商としてリガ、西インド諸島、ポルドーと転居していくうちに、体調不良となり、1820年代に「植物性万能丸薬（vegetable universal pill）」を開発、販売し始め、1828年には販売促進目的で英国健康協会という会社を立ち上げもした。いわゆるニセ医者の走りで、特許薬販売者であったハロウエイ（Thomas Holloway, 1800-83）やビーチャム（Thomas Beecham, 1820-1907）と共にヴィクトリア朝中期版葬儀組合の3人組に数えられた。彼によれば、すべての病因は悪い血液に因由するもので、アロエなどからなる天然の薬草丸薬を服用（1日に最高30錠）すれば、コレラさえ直ると謳っていた〔ロイ・ポーター著田中京子訳『健康売ります』（みすず書房、1993年）322-7頁、黒崎周一著『ホメオパシーとヴィクトリア朝イギリスの医学』（刀水書房、2019年）218-9頁〕。
52. コブデンについては、さしあたり経済学史学会編『経済思想史辞典』（丸善、2000年）142頁を参照。より詳細には、熊谷次郎著『マンチェスター派経済思想史研究』（日本経済評論社、1991年）第1章を参照。ここでは、コブデンはトムソン（Thomas Perronet Thompson, 1783-1869）の全6巻『トムソン政治論集』（1842年）を介してA. スミスに接近し、「『国富論』と聖書とを同一視するような道徳的関心が中心であった」と指摘されている〔熊谷同書46-7頁〕。
53. ニューマンは「有益な通商（Commerce）の道徳的限界について」という11頁の論考を『コンテンツポララー・レビュー』誌の第37巻に寄稿している。ちなみに、ニューマンはユグノーの末裔であったミドル・クラスの商人の家に生まれ、オックスフォード大学を2科目における1級合格者として卒業し、ブリストルの無教派のカレッジでの助教（古典語）やマンチェ

- スターのニュー・カレッジ教授を経て、ロンドン大学でローマ文学教授（46-63年）を務める一方で、英国教会からは離れていき、1879年にはユニテリアンとなり、宗教論争では高名なカトリック神学者であった兄（John Henry, 1801-90）に抗し合理主義的立場をとった。また肉食主義者や反種痘主義者としても知られていた〔『西洋人名辞典』967頁、及びS.ギリー・W.J.シールズ著指昭博・並河葉子監訳『イギリス宗教史』（法政大学出版局、2014年）433、439、503、511頁〕。
54. 1838年9月10日のヨーク・ホテルでの小講演会〔司会者はプレントイス（Archibald Prentice, 1792-1857）を機にマンチェスター反穀物法協会が結成〔39年1月28日〕に向けて本格化していくのは同年9月24日のことではあるが〔北野前掲書387-9頁〕、トーリーの指導者ディズレーリ（Benjamin Disraeli, 1804-81）が46年2月20日に下院の場で始めて「マンチェスター派」という名を口にしたとされている〔熊谷前掲書5頁〕。
55. 教区毎に自作農を中心に5～15名選出（3年毎改選）され、就学強制権を有していた学校委員会の生誕は1870年の基礎教育法を機に都市部では相次ぎ、1902年のバルフォア教育法（Balfour Act）によって廃止されたが〔B.サイモン著成田克矢訳『イギリス教育史Ⅱ』（亜紀書房、1980年）214-21頁〕、ともあれ、形式上は5歳以上のすべての子供たちが国民協会、内外協会という宗教系の学校か、あるいは学校委員会立学校かで12歳または14歳になるまで就学する体制とはなった〔トマス・ヒル・グリーン著松井一麿・浅野博夫・宮腰英一・大桃敏行訳『イギリス教育制度論』（御茶の水書房、1983年）第2章、及び大田直子著『イギリス教育行政制度成立史』（東京大学出版会、1992年）第1部を参照〕。ちなみに、自由党のグラッドストーン（William Ewart Gladstone, 1809-98）が70年に上程した教育法案（8月9日成立）はクエーカー派出身で教育局（Education Department）副議長であったフォスター（William Edward Forster, 1818-86）が立案したもので、教会と国家との1種の妥協案でもあった〔空本和助著『イギリス教育制度の研究』（御茶の水書房、1969年）144-6頁、あるいは梅根悟監修『義務教育史』（講談社、1977年）140-55頁等を参照〕。
56. スミスやマルサスの教育論については、さしづめマーガレット G. オドナーネル著関劭訳『古典派政治経済学者の教育思想』（晃洋書房、1993年）120-2、151-2頁、柳沢哲哉「マルサスと民衆教育」『香川大学経済論集』66巻4号（香川大学経済学会、1994年）、関劭「アダム・スミスの教育論」『南山大学経済研究』10巻1号（南山大学経済学会、1995年）、加納正雄「アダム・スミスの教育論」『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学』50号（滋賀大学教育学部、2000年）、及び拙著『増補版 マルサス勤労階級論の展開』（昭和堂、2005年）283-7頁等を参照。
57. エンプソンは1824年にマッキントッシュの後任として、一般政治とイングランド法の担当教授として東インド・カレッジに着任し、25歳年上の同僚のマルサスから愛顧を受け、マルサス没後にはその旧宅に転居した。また、ジェフリーからの信頼も絶大で、29年に『エディンバラ・レビュー』誌の副編集長となるばかりか、38年6月には彼の1人娘シャルロットと結婚した〔前掲拙訳「マルサス氏の生涯、著作、および性格」82-3頁〕。
58. マーティーノの略伝は、さしあたり、ポーキングホーンほか著櫻穀監訳『女性経済学者群像』（御茶の水書房、2008年）2章を参照。なお、マーティーノがマルサス宅に身を寄せていたのは1833年8月のことであり、マルサスの方も全25話（月刊）からなる彼女の『経済学例証』（1832年2月-4年2月）を「自分の考えをうまく提示している」と考えていた〔『知的源泉としてのマルサス人口論』12頁〕。ちなみに、マーティーノが分配問題に意を注いでいるのは5号～11号の物語で、わけても6号の「ガルブリッジ島の幸福と災難」でマルサス

人口論を扱っている〔上宮正一郎「H. マーティノー経済学と人口学説」『マルサス学会年報』13号（マルサス学会、2003年）16-26頁〕。

59. スコットランド生まれのマッキントッシュは1790年頃に医学への道を断念し、その後は評論家、裁判所判事、『エディンバラ・レビュー』誌の記者等を経て、1818年1月に法律及び政治学担当教授として東インド・カレッジに就任した。彼は同僚となったマルサスに『大英百科事典・補遺』（1824年）への「人口」の項目（〔10〕271-353頁）を寄稿するよう推奨した〔飯田裕康・出雲雅志・柳田芳伸編著『マルサスと同時代人たち』（日本経済評論社、2006年）119-26頁、及び『マルサス人口論事典』269頁〕。
60. マルクス（Karl Marx, 1818-83）によって「滑稽な論争」とも別称されたこの古典的な恐慌論争の様相や推移に関しては、谷口吉彦著『恐慌理論の研究』（有斐閣、1940年）第2・3篇、溝川喜一著『古典派経済学と販路説』（ミネルヴァ書房、1966年）、及び中野正著『古典恐慌論』（雄松堂、1969年）Ⅱ等を参照。

引用文献一覧

（邦訳書を併記している原文引用にあたっては、それが全訳である場合、原典との照合のうえで訳書の当該頁のみ付記した。また訳書からの引用に際しては幾分改訳を施したところもある。）

- 〔1〕 J.Bonar, *Parson Malthus* (Edinburgh:Lorimer & Gilles, 1880)〔川西正鑑訳「坊主マルサス（上）」『拓殖大学論集』1巻2号（拓殖大学拓殖研究会、1931年）、拙訳「坊主マルサス（下）」『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』55巻1号（長崎県立大学佐世保校学術研究会、2021年）〕
- 〔2〕 J.Bonar, *Malthus and His Work*, 1st ed. (London:Macmillan & Con., 1885)〔堀経夫・吉田秀夫訳『マルサスと彼の業績』（改造社、1930年）〕
- 〔3〕 J.Bonar, *Philosophy and Political Economy*, 2nd ed. (London:George Allen & Unwin Ltd., 1909)〔東晋太郎訳『経済哲学史』（大鏡閣、1921年）〕
- 〔4〕 J.Bonar, *Malthus and His Work*, 2nd ed. (London: George Allen & Unwin Ltd., 1924)〔堀経夫・吉田秀夫訳『マルサスと彼の業績』（改造社、1930年）〕
- 〔5〕 T.R.Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, 1st ed. (London :J.Johnson, 1798)〔永井義雄訳『人口論』（中央公論新社、2019年）〕
- 〔6〕 T.R.Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, 2nd ed. (London:J.Johnson, 1803)〔吉田秀夫訳『各版対照人口論Ⅰ～Ⅳ』（春秋社、1948-9年）〕
- 〔7〕 T.R.Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, 3rd ed. 2 vols (London: J.Johnson, 1806)〔吉田秀夫訳『各版対照人口論Ⅰ～Ⅳ』（春秋社、1948-9年）〕
- 〔8〕 T.R.Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, 5th ed. 3 vols. (London:John Murray, 1817)〔吉田秀夫訳『各版対照人口論Ⅰ～Ⅳ』（春秋社、1948-9年）〕
- 〔9〕 T.R.Malthus, *Principles of Political Economy*, 1st ed. (London:John Murray, 1820)〔吉田秀夫訳『経済学原理上・下』（岩波書店、1937年）〕
- 〔10〕 T.R.Malthus, "Population", in *Supplement to 4th, 5th, and 6th eds, of the Encyclopaedia Britannica*, Vol.6. (Edinburgh:A & C. Constable, 1824)〔箕輪伊織訳『人口の原理要論』『経済学季報』第53巻第1.2号（立正大学経済学会、2003年）271-353頁〕

[11] T.R.Malthus, *Definitions in Political Economy* (London:John Murray, 1827)[玉野井芳郎訳『経済学における諸定義』(岩波書店、1950年)]

[12] T.R.Malthus, *A Summary View of the Principle of Population* (London:John Murray, 1830)[小林時三郎訳『マルサス人口論綱要』(未来社、1959年)]

[本稿はコロナ禍の脅威が終息しない状況の下で作成された。それゆえ、書誌的事項の検索に際しては、多くの方々による厚情に与かった。この場を借りて、その鴻恩に対し一言の謝辞を付言し、改めて、遠藤和朗(東北学院大学・名誉教授)、中川栄治(広島経済大学・名誉教授)、安川隆司(東京経済大学・経済学部教授)、佐藤空(東洋大学・経済学部准教授)、田中育久男(愛知大学国際問題研究所客員研究員)、郷家祐海(慶應義塾大学大学院文学研究科・助教)の諸兄に深謝しておきたい。なお、本稿に見られる過誤や文責が執筆者にあるのは言うまでもない。]